

藝妓とモダンズム  
 新橋藝妓と政治家  
 女將の俵骨  
 柳橋の夜景  
 二三流花街  
 藝妓の内面生活  
 金、金、金  
 牛玉と水湯

のほせあけて無理心中を強ひる程の熱はなくとも、男と生れたからには藝妓遊びも少し位はやつてみねばならぬ。

明暗紅燈の巷に、弦の音を聴き乍ら、意氣な妓おんなの小唄に淺酌低唱する情は、我國特異の風習であつて、今やゲイシャ、ガールなる言葉は世界の隅々まで響き渡らんとしてゐるありさまだ。

モダン・ガールに近代人としての明るさと輕快かろたがあり、藝妓には傳統的な美しくしさと氣概とがある。夕べに洋装、髪かみの女とダブルベッドに楽しみ、朝あしたに浮世繪式美人と閑雅な離室はなれむろに戯れる二重生活は、それが不經濟である程、又その感興の度も深くなるといふわけである。

かうした新舊二様の染分手綱を、心ゆくまゝ操つる喜びは日本に生れた人間の特權であり、藝妓の捨て難き理由も亦そこにある。

然し、その藝妓なるものゝ勢力も、カフェーの目ざましい進出と、その背影をなす女給群に壓倒されて、次第に衰微さいまいの道を辿りつゝあることは争へない。

簡便に要領よく——これが近代人のモットーである。小唄の唄の稽古から始めて、高い玉代と席料

を拂つて浩然の氣を養ふよりも、覺え安い俗歌の二つ三つ習つて、それに愛想よく和して呉れる女給があれば、なる程その方が安上。ではあらう。

この新しい敵を迎へて、その活路を開かうとする藝妓。極みは、それが三者の眼から見てさへ、滅び行く者の哀れな蕩播きを感じしめる。彼女たちの唯一の味方であつた金持の旦那なるものさへ、三度に一度のカフェー遊びが三度に二度、三度に三度といふ悲しい數字を示すやうになり、ほんの一部の通人粹士だけが、片手にカフェー、片手に待合といふ氣の抜けた遊びやう。轉換しつゝある。かて、加へて此の不景氣だ。

「なんとかしなくちやならない。」

何處の土地の三業又は二業組合も、いまこの莫然たる問題を拂へて、慘憺たる研究をつゞけてゐる。そして頭の平凡な人たちの研究の結果が

「時勢の進展に鑑み當組では爾今玉代席料共著しく低下致すことに決議仕云々」といふ甚だ不體裁な三業組合の新聞廣告だ。

そして待合の女將や、料理屋の亭主たちは

「チエッ！金！禁なんて下らないことをやるものだから、日本が不景氣になつて、世間の人間はみんなケチンボになつて了つた。」

そして、何もかも悪いことは、これみな金解禁のお蔭である——と云つた風に考へてゐる。

「いくらカフェーがいゝの、バーが面白いのつて云ひましても、宴會には矢張り藝妓が出なくちやあ、憂さ晴しにも氣晴しにもなりやしませんものネ。」

と、これが最後の切札なのだ。

だが、この宴會すら昨今では極めて寥々たるもので、まるでお話しにならないといふ。

そこで、東京隨一の大花街、金城鐵壁の地とさへ云はれた新橋藝妓組合では、よりより幹部が協議して、漸く絞り出した智慧が藝妓のモダン化といふ、木に竹を接いだやうな妙案である。

曰く、ダンスの教授、曰く英語の教授、それから常識の普及、イットの研究等々だ。

然り而うして、藤間流の踊りの稽古場がフォックストロットやワルツの舞踏研究所となり、三味太

鼓がジャズに變り、清元や常盤津のおさらへ場が、英語の教室に變つたのだ。

文金高島田にぬぎ下けのお召の着物、お尻はボンとろへ尖らせて、タラタラタッタ、タラタラタラタ……と、おさんどんが臺所でハタキをかけるやうに踊るのである。

「チヨイと梅奴さん、あんた駄目よ妾の足ばかり踏んで……それ、もつとこちらへお尻をくつつけないからフラフラするんじゃないの。構はないから男のつもりで抱きついて頂戴。なにもビクビクすることないわよ。」

そして、さう云ふ妓の脚も亦、股大根のやうに曲りくねつた逸品である。

いやはやどうも、不惑で不惑で、これが新橋藝妓の所作事かと思ふと、いかに時世時節とは云へ、おかし涙がこぼれて仕様がな。

朝日新聞ゴシップ氏の云ひ草にもある通り、ツンと澄まして英語を學んでゐる態度は、まことにもつてしほらしい。英語の先生が

「眠いはスリープ。喰べるはイート。眠るはスリーピング」

甚だやゝこしい講義をすると、氣の早いのが

「先生、それでは喰べたいはイートビーですか？」

なんと諸君、これでは英語の先生も骨が折れやう。けれども、モダン・ガールを雨蛙と感違ひした女よりはましである。

由来、新橋と云へば明治の初年から今日まで、政府の大官や富豪貴族の遊び場所として、伊藤博文以來いろんな人が遊んで來た。妓でもお鯉さん始め幾多の名妓が、盡きぬ艶剛を流し、今は二人ともなき政友會の横田千之助と、舊憲政會の望月小太郎とが一人の妓を中心に戀のたて引をやつたことも有名である。それやこれやで、新橋藝妓と云へば鼻も高く、格式も高く、氣品も高く、無論あの方だつて高いと云つた工合に、お高くとまつてさへるればよかつたのである。

藝は賣つても身賣らぬといふ、江戸前藝妓の意地と張は、なにしろ相手が横勢と金力との二つ道具でせめつけたから、そこだけはいつと苦しい板挟み、さなきだにかうした客筋は却つて野暮天の多いもので、綺麗な妓さんの餅肌ばかりが眼について仕様のないと云つた連中。

されば景氣のいゝ時代は、ほかの連中が割込に入つても、なかなかうんと頭を縦には振つて呉れぬ。百や千の端た金でお客面をすると、あべこべにいゝ恥さらしをしなければならぬ慶勢さを見せたものだ。

もともと新橋藝妓の出先は築地を主とし、築地あつての新橋なのだ。

晝間は一帶に埃つほい築地附近も、一度夜が訪れて、溝の水に灯影が明滅するやうになると景色は急に一變する。

宵の暗を衝いてキャデラックやバックカードの自家用高級車が、待合の入口でピタリと止まると、たいてい中なる客は今を時めく顯官であつたり、政黨の總務や大實業家であつたりするのだ。

待合政治は築地から起り、築地が政黨政治の中心地とさへ云はれてゐるのは、今更こゝに喋々するまでもなからう。

それに就ても愉快なのは、緊縮内閣のお偉い方々が、吾が黨天下になつて間のない頃、一夜この築地で酒宴を催したと思ひ給へ。

會場は新喜樂だつたが、それとも「の家」であつたか知らないが、兎に角其家の女將は緊縮なんてものが大嫌ひである。それに、御得意先には政友會系のお座をが多いので

「御宴會は民政式にいたしませうか、それとも政友式にいたしませうか。」

宴會係は多分鈴木輪長であつたらう。吾が黨天下の威力を示すはこの時とばかり、大きな腹を一層つんのめらして、

「あゝ、もちろん民政式だ！」

と悠然たる態度で未きく頷いたものだ。

女將の口邊にニヤリと皮肉な微笑が漂つた。それから永いこと待たされて、さて出来上つた料理を見るに、うまいものは小さなお皿にチヨッピリと入れ、葉つばや大根の漬物をデカデカと盛り澤山に大きな鉢で突きつけられた。おまけに酒が「これでお終ひです」と云はぬばかりの二台瓶詰。それを又

「ハイ、民政式お料理が出来ました。」

と云つて突きつけられたものだから、お歴々も今更開いた口が塞がらず、骨を突刺すやうな皮肉を浴びせられてグウの音も出なかつたといふことである。

女將の俠骨まことに愛すべきものがあるではないか。

このエピソードなどは新橋で遊ばむとする人にはよき参考資料ともならう。

それにしても、ジャズやダンスを賣物にしなくてはやつて行けないやうになつたといふ新橋藝妓、すべての技を家元直傳だと云つて誇つてゐた彼女たちの將來は、果して今後どんな風に轉換するであらう。

單にモガに對抗する一時的な對策か、それとも日本の旦那など蹴飛ばして、將來大いに外人相手に飛躍するつもりか、まあ長い眼で見ていることにしやう。

觀光局あたりでは、ゲイシャ・ガールを世界的に紹介する意圖であるといふし、序に龜戸や玉の井なども紹介するやうになるかも知れぬ。かくして近き將來に新橋の藝さん達が、

「日本人の御座敷なら御免蒙るわ、ケチでしつこくて聞いたゞけでもぞつとする。」

てなことになると、その時始めて今のやうに暴落した藝妓の價値を高めることが出来るであらう。

それかあらぬか、芝居でなければ夜も日も開けぬと云つてゐた彼女たちが、近頃ではラモン・ナヴァロがいゝとか、ジョン・ギルバートが男性的な魅力があるとか云ひ始めたといふ。歌舞伎座の幹部連もかうなると、オチオチ落着いてもゐられまい。

いや、それよりも遙かに時代の尖端を切つたのは新橋の名妓照若であつた。辯護士と左翼闘士某とに惚れられて、餘儀ない事情からプロレタリアを選んだが、ひかされて見て始めて悪夢から醒め、結婚後一年も経たぬうちに湘南の海濱で露の如く散つた。

彼女の情史は書けば涙ぐましい一編の哀話であるが、今はその餘裕がないから省略する。

兎まれ新橋は遊ぶに最も多額の金を要するところ、半玉の水料だつて生優しい金では出来ないものである。こゝで知名の實業家が巨費を投じて水揚較べをやつた珍聞もあるが、現存の人には敬意を表して内面曝露は遠慮してをかう。

夏の遊蕩氣分に浸るには、どこを差しをいても柳橋である。大川に臨んだ濱町河岸の青樓の二階で對岸の臺の上に輝く月を愛でながら、しんみりと好いた同志で戯れるに帝祇隨一と云つても過言ではあるまい。

兩國橋の向うに巍然と聳えてゐる國技館の屋根も、無数に飾りつけた電燈に灯がはいると、空に咲いた花のやうに美しくなる。

柳橋と云へば、歌舞伎のバックでもお馴染の深いもので、黙阿彌翁以來いろんな作者が劇の中に織り込んでゐる。

こゝではモダニズムなど振り向いてみやうともしないで、飽迄江戸の情緒を食ひ止めやうとする江戸つ見氣質が濃厚だ。

俗に傳法肌といふ煮氣な下町氣分は、こゝの技が古くから持つ誇りであつて、氣も荒い變りに早く、異藝妓の血が流れてゐる。

天保時代に深川を追はれた藝妓の一部が、時の幕僚水野越前の優忍な仕打を憎みつゝ、頑としてこゝ

こゝに自分たちの位置を守つて来た反逆の精神が、自から一つの傳統として残つたものであらう。

新橋が政治家の巢窟なら、柳橋は投機業者の遊び場所である。

魚河岸の旦那、株屋の旦那、米屋町から綿糸、砂糖の間屋連が、柳橋藝妓のお得意である。對手がキビキビしてゐるから、勢ひ彼女たちもキビキビせざるを得ない。

一日に千金万金を掴んだ取引所の旦那が、金を湯水の如く使つて、金で面を張らうとするから、張れるものなら張つて御覽——と、乙にすまして通塾するところに、柳橋藝妓のねうちがあるのだ。

意地づくとなれば、涙を呑んで戀も金も叩きつけやう。さうした氣概の發露はそこにはいろいろな口マシスを生んで、千萬長者に財儲を喰はして喜んだり、そのあてつけに、裸一貫の力士と愛の巢をつくつたりして向ふ煮氣の頼むところを見せる。

だから柳橋藝妓は芝居が好きだ。わけでも羽左衛門ひいきの技が多いのは、羽左のキビキビした歯切れのいい臺詞が、ピッタリ彼女たちの趣好にハマつてゐるからにはかならない。柳橋の百本杭と云へば、芝居の女で「魚屋の茶碗」や「鑓掛松」があり、殊に羽左十八番の「時鳥水舞音」では、羽左

の次郎吉が久太を百本杭に蹴飛ばすときの凛々たる名白は、柳橋の藝妓をうつとりとさせて了ふのである。

講談では阿部豊後守の隅田川名馬の渡りがあり、乃木將軍と辻うら賣の美談がある。つまりさうした古い物語りの影響が、かなり根強く土地の藝妓に喰ひ込んでゐることは、柳橋で少し遊んだ人には誰にも成程と領けるのである。従つて、一步待合に足を踏み入れれば、一にも二にも只女を抱いて寝ることしか考へない御仁は、つまらない恥を搔かない前に、ほかの場所を選んだ方が得策であらう。

こゝではどんな難題を吹きかけられても、大きく領いてみせる雅量が第一番に必要なだ。

「ねえターさん。いつか妾しをお芝居へ連れてつて頂戴ね。」

可愛いお酌がかう云つてねだれば

「あゝ、連れて行くよ。」

「ねえターさん。モーターボートに乗つて遠出をしない。」

「うむ、行かう！」

「ねえターさん、妾し一ペン飛行機に乗つてみたいわよ。」

「さうか、それなら一緒に大阪まで行かう。」

と、たとへ嘘でもいゝから、こんな調子に大風呂敷をひろげるのだ。

又、お客の方でも、なんにも知らないお酌をつかまへて

「おいチビ子。お前漬物屋へ行つて葱の朝漬を買つておいで、ホラお足はこゝに五圓ある。車に乗つて行つて來な。」

「葱の漬漬なんて賣つてるの？」

「あゝ賣つてるよ。」

そして暫らくして、

「ターさんの意地悪、葱の朝漬なんてどこにも賣つてやしないわよ。」  
と、面ふくらせて歸つて來る。

つまりさうした他愛のない遊びをして喜ぶ客筋が多いのだ。

物見だかくて、氣が早くて、喧嘩が好きで色氣が嫌ひ(表面上では)な柳橋の妓さんたちは、へたまごつたことでも云はうものなら、慢罵を叩きつけてスツと席を外す位のことにはやり兼ねない。

成島柳北などは、柳橋藝妓のこの向ふ意氣の強さを極力賞讃したもので、今日でも變り種の粹人は柳橋を無茶苦茶に賞め立てる。

簡單に射落せる妓はどこにだつてあるのだから、あぶく銭をもつて使ひ場所に困つてゐる人は、大いに柳橋あたりで野暮一點張りて押通すのも面白からう。

太川端だからと云つて、必ずしも夏の夜に限つたことはない。川波の音に底冷えを感じ乍ら、熱甜をグイッと傾げる所に甘露の味がある。

新柳二橋の花街を除いても、東京にはまだ多くの藝妓街がある。下町で深川八幡の近くに、昔鳴らした異藝妓のあとを受けた深川藝妓がある。然し今日の深川藝妓には往時の面影は微塵もない。

辰巳劇場あたりで、劇俳優者に熱をあけるといふ寂れ方である。

深川藝者を買ふよりも門前仲町の宮川で鰻飯でも喰つた方がましであらう。宮川の主人は有名な宮川曼魚氏、八反のどてらか何か着込んで、せまこましい三疊の部屋で熱心に江戸文藝の研究をつゞけてゐられる。

八幡宮の境内を抜けて、不動尊の前通りなど歩くと、千葉の成田山に参詣したやうな變つた氣分はあるが、別に取り立て、書く程のこともない。

夜になるとこの附近を乞食徑賣がウロ／＼して濁つた聲で呼びかける。それから淺草の公園藝妓、下谷上野公園の裏側に池ノ端の花街があり、芝の神明、芝浦のガード下には船員対手の色町がある。

山手方面では赤坂溜池を筆頭に、麻布の山元町、麴町に富士見町、四谷では荒木横町、牛込に神樂坂、小石川に白山藝妓、本郷では湯島天神と駒込動坂の二ヶ所にある。

赤坂は別として、ほかの花街は安直で而かも轉び易い。従つて遊ぶに氣苦勞はないし、苦勞してま



で遊ぶ必要もあるまい。

ひどい所では、初會の客には遊興費の半金を先拂ひに請求する不愉快な所さへある。

二流地以下の花街では、どこも同じやうに賑やかに一騒ぎやつて、あとは呂律の廻らない口でなにか喋り乍ら、奥の四疊半に雲隠れを急ぐ客が多い。

客がムキ出しなら、藝妓も亦それに負けずに猥談でも猥歌でもカッ飛ばす。

若いのも年増でも御意のままだ。敢て多くを語る必要もあるまい。

最後に、藝妓なるものゝ内面的生活に就て一言しやう。

本来から云へば、藝を賣つて身を賣らないのが藝妓である。然し、藝だけ賣らせたのでは待合や抱え主の採算が取れない。

夜の十二時限りで彼女たちの仕事を終へて了つては、一ヶ月の線香代全部集めても知れたもの。假りに一時間二本として、毎夜、六時から十二時まで一日も缺かさず勤めをして月に三百六十本。

一本五十錢として百五十圓。外に祝儀を二百圓とみる。これを線香と待合乃至は料理屋と、藝妓と

抱え主が分配したのではまるでお話しにならぬ少額なものとなつて了ふ。

買求めた體はこれを有効に使ふのが資本家の目的だ。時間の區別別によつて線香代に川違があり、

紋日や祝ひごとのある場合など、倍額の線香代が頂戴出来る特典はあつても、三十日きまつて同額の稼ぎが出来るとは極まつてゐない。

そこをうまく利用したのが特別祝儀であり、遠出なるものである。

夜の十二時から朝の六時まで客に買はれた藝妓は、この六時間をどうする。鳴物禁止時間だからと云つて、まさか御通夜ではあるまいし、シヨンボリ坐つてゐるわけには行くまい。坐つてゐられなければ寝るより外に道はないのだ。寝るとすればお客に買はれた體だから、一人で寝るといふことは許されない。

男と女が一つ部屋で一つ寢床 寢るのである。それだけである。

まさか夜遅くなつて小唄や端唄でもなからう。かくして、藝も賣るし身も賣らねばならぬ。娼妓や淫賣より高いのはその爲だ。

又、藝妓自身にとつても、年期つとめを終へるためには、成行に委せてはゐられない。少額の歩合で前借を返へすことさへ容易ではないのに、四季の衣裳代とか、化粧代、食費、お小使など計算に入れると、到底一晩十本や十五本やそこいらの稼ぎだけでは、着物の裾に火がついたやうなものだ。盆暮には出先の待合や料理屋へそれ相當の贈りものをせねばならぬ。そこらの女中さんたちの機嫌を損じぬやうに、その時々的心使ひも要る。一旦この女中さんたちに憎まれたが最後、彼女の客が招いても女中たちはこれを體よく断はるだけの掛引をやる。ストロストンで唄つてゐるときは呑氣さうにも見えるが、豈計らんや明けても暮れても金である。

一年を通じての髪結代だけでも決して二十や三十の少額ではないのに、この髪結さんに對してまでも贈りものが要る。

かうして一方に經濟生活の上に弄々と胸のつまるやうな思ひをしながら、客の機嫌を取り、ラブ・ミーもたまには書かねばならぬ彼女たちである。

それとも知らず、酔拂つた客は結び立ての髪 邪に填し、小紋お召に盃の酒をぶつかけられる。華々しい姿に比較して悲しい商賣。

然し、藝でも體でも絶え回なしに買つて呉れる人があればまだ幸せな方だ。

惡どい抱主などは、日々の稼ぎ高を計算してはチャンと茶の間に貼りつけてをく。

賣れる兒と賣れない兒の線香代の數字に著しい差が出來てくる。

さうなると、食事さへ一番後廻しにされて、隅つこで小さくなつたまゝガブ／＼と茶漬を掻き込むといふ哀れさである。

あらぬ浮名はいゝとして、つまらぬ噂など立てられると、そこには又二重三重の苦しみが生ずるしと云つて早くいゝ旦那を掴まへなければ朋輩に幅が利かぬ。藝妓にとつて最もありがたいものは、金をジャンジャン出して呉れるパトロンだ。

パトロンのない者は賣れつ兒にもなれないし、組合主催の温習會などがあつてもいゝ指を喰へて見ている以外に仕方がない。

戀しい男を捨て、嫌な男を選ばねばならないのはすべて基因がそこにある。  
殊に一流花街では年期があけて、そのまゝ年期あけの體で嫁づくなどいふことは甚だ不見識なこと  
と見做されてゐるから、旦那が出来るまでいやいやながら商賣を續ける女さへ尠くないといふこと  
である。

それにも増して哀れなのは、漸く乳房のふくらみかけた半玉が、一本立となるために黠くちや爺の  
人見利供に供されることであらう。

年若い一本になつたばかりの藝妓を買つたら、水揚された時の經驗を訊ねて見給へ。たいていの妓  
はそれを悲しい經驗として涙ぐむで話すに違ひないから――。

少々話しが濕つほくなつた。さて次はいよく暗黒街の魔窟編に移りませう。

第九章 魔窟街

魔窟街のカフェー  
 硝子窓と女の眼  
 鼠鳴きの誘惑  
 私娼の立志傳  
 木賃ホテル街  
 ホテルの別間  
 露店淫賣  
 土管中の闘争  
 郊外の私娼状尾

魔窟は都會につきものである。

淫賣婦と泥棒は根絶し出来ぬものと、昔から相場がきまつてゐる。いくら撲滅しやうたつて、結局豆腐にかすがひ、糠に釘である。

だから、取締當局者は臭いものに蓋をするつもりで、なるべく外国人に氣附かれないやうに痛ましい努力をつつて来た。

するとまた、親の心を知らずと云はふか、矯風會あたりの婆さん達が、機會あるごとに遊廓と淫賣窟などを外人たちにお目にかける。

お目かけなくても、外国人は日本女に就てはよく知つてゐる筈だ。

實際日本の女は世界到る所に出稼ぎに出てゐる。支那は勿論、印度、南洋、歐羅巴方面にまで進出を試みてゐるではないか。それを若干の金額によつて、商品の値を算定する。それは、別に恥ではないのである。だから東京に一つや二つの魔窟があつたからとて、名譽にこそなるまいが、別に恥ではないのである。

公娼私娼を廢止する運動も永いこと続けられて来たが、その効目らしいものは一向に現はれて来ない。否、益々増加しつつある形勢さへ見える。

理窟から云へば、人間の貞操が若干の金錢によつて、商品の如く取引されることは望ましいことではない。けれども、公娼私娼がなくなれば、あの數十萬數百萬の獨身者は、そのあり餘る精力をどこに向けるであらう。

所詮、あちらを立てればこちらが立つず、こちらを立てればあちらが立たぬ世の中である。まだボンボン私生兒を弾き出されないだけ喜ばねばならぬ。

魔窟の女が云ふやうに

「くよくよしたつて始まらない。来る客、来る客手玉にとつて、ボンと投げたい生きた錢。」

野暮と愚痴は老人に委して、さて僕たちは暗黒街は夜の魔窟を訪れやう。

前にも述べたやうに、千束の私娼が府下寺島町の玉の井に追拂はれてからは、東京市内には一大私娼街といふものがなくなつた。警察の眼を掠めてビクビクし乍ら掠奪をくはへこんでゐる所は到る所

に見受けるが、魔窟のほんとうの気分は、やはり公然の秘密にしてゐる龜戸や、玉の井あたりでないとその實感が湧いて来ない。

龜戸と云へば東洋モスの大爭議以來、今では日本の津々浦々にまで響き渡り、郊外の工業地帯としてプロレタリアの密集地である。

町の中央には龜戸天神があつて、藤の花が咲く頃になると市内から遊山がてらに出かけて来る人も多い。

街はいま日が暮れたばかりである。天神様の裏手にあたる露路といふ露路は、いよいよこれから活動舞臺にはいらうとするところ。僕も亦自動車を魔街の入口で乗り捨てた。

まだ人通りは繁くないが、甘いむせるやうな脂粉の薫りが、どこからともなくヒタヒタと流れて来る。

入口だけ模様ガラスを嵌めたモダン風なカフェーに入ると、白粉をこつてり塗つた娼婦型の女給が酒を運んで来た。

「これからどちらへ？」

「どちらへつて、こゝへ来たのぢやないか。」

「あら嘘ばつかし……」

と、女給が横目使ひに伺むやうな恰好をする。

「チャシと心得てるやあがるから癪だ。」

「では僕の行先がわかるのかい？」

「わかるわよう！これからお楽しみでせう。」

「なにを？」

「まあ、しらはつくれてるのねえ。オレ、ちゃんと貴方の顔に書いてるぢやあないの。呆れた方ねえ。」

「いや、こちらで呆れるよ。僕にはさつぱりわからん。どんなお楽しみを見せてくれるのか知らぬが、面白いことなら相談に乗らうじやないか。」

「あゝ苛烈つたい。」とキユツと僕の腿のあたりを抓る。

同じカフェーでもピントの向けどろろが極めて急速である。場所柄だけに争へない。

「だからハツキリ云つて呉れたらいいだらう！かうならかう、あゝならあゝとネ。」

「そんなこと云へないわよう。」

「なにを云つてるんだかちつとも要領を得ないぢやないか。」

「要領はあなたの方が得ないのよ。」

「僕にはちやんと分つてゐる。」

「わかつてゐるのですしたらその通りにすればいいぢやないの。」

「だから、これだけ呑んだら歸るよ。」

「いやつ！歸さないから。」

さて、歸さなければどうすればいいだらう——なんて、そこまで問拔ける必要もないが、カフェーの情景さへこの通りである。

いゝ加減に見切りをつけて戸外へ出やう。

然し、この場合そとを歩くのがいやな方は、押賣されたものを値切られるだけ値切り倒すのもよからう。すぐ近くには一泊一圓のホテルもある。

いつの間にか巷には一種異様な妖氣が迫つて、人内市場に押しかけた無数の人影が、白鬼の夜行する如くうろついている。

こゝでは傍若無人とか言語同断と云つたやうな行ひも天下御免の平凡事だ。

艶笑奇聲がいたるところに爆發し、不埒な猥談が彈丸のやうに亂れ飛ぶ。

この秘密ゆえに町の財政が維持され、町の商家が危ふく經營を保つてゐるのだ。

夜の龜戸は文化的色彩を帯びた明るい華かな歌樂舞ではない。ヴェールをつけたマダムでもない。

一糸纏はざる熱帯の蠻女に等しい赤裸々な別世界だ。

女は奈落の底に喘ぐ奴隷であり、男は金の方で女を征服する暴君である。

金銭と人内の商取引が、こゝ程完全に結びついた場所は他にはない。

落ち行く女にとつては最後の踏臺であり、落ちた女もこれ以上を豫想しない地獄の三丁目である。

彼女たちの死物狂ひな誘惑は、溺れるものが一本の藁をも掴まうとする悲痛なあがきに外ならない。

同じ賣笑婦にしても、ストリート・ガールや、忍びこみの連中とはブルジョアとプロレタリア程の開きがある。

まだいたいけな少年と少女でさへ、往來の真中にて淫賣をこつこの遊びをするといふ爛れ切つた街だ。

色氣も喰氣も精一ばいの若い人たちが、どうして漫然と指を喰へて見てゐるやう！右も左も、前も後も、

女の内に飢ゑつた血氣の青年が、野獸のやうな目を光らせてゐる。

網の目のやうに錯雑した路次に、一步足を踏み入れたが最後、初めての人などは再びちとの路に引

返すことは出来ない。何百となく軒を連ねた娼家の入口を一軒々を覗いて見ると、どこもこゝろ皆立

關の障子に細長い硝子窓を飾め、そこから眼だけ覗かせた女が旺んに通りすがりの男を呼び止める。

先づ「チュツ、チュツ、チュツ」といふ風泣きの會圖で男の歩行を止めるのであるが、この唇を

吸ひこむやうに鳴らすエロチックな響きは、かゝる巷の空氣をいつも吸つてゐる人間にさへ、ムクム

クと劣情を湧き立たせる。

それでこちらが踏み止まると「トントントン」と障子を叩いて、艶つほい眼に力の及ぶ限り技巧を加へてチャームする。

薄明りに照らされたガラス越しの女の眼、この魅力を充分に感受できない人は、なまぢつか魔窟などに足を踏入れぬがい。

モガのウイंकに馴れた人には、かうした嬌態は必ずや一種の戦慄を感じしめるであらうから——男も女も無言のまま、ぢつと眼を見合した瞬間のあの氣持、何もかも言ひたけに哀れみを乞ふてゐるやうな女の眼が、やがて笑みを含むだ眼差に變化するまでの二三秒間が、獵奇派の人々には浮世繪を見るやうな心地がするであらう。

「ねえ、避んでつて頂戴よう！素通りなんて野暮な旦那のすることよ！」

やがて相手の女がかう切出した時は、もうお互の胸には何等の緊張味もない。

「いくらなら遊ばせるんだい？」

「そんな水臭いことこゝで云はなかつていゝでせう。お茶を召上るだけでもいゝから一寸あがつて頂戴す。」と来る。

若いのや年増や、或ひは普通の家にゐたり、まだ花の蕾とも云はれるやうな、十五六歳の少女たちが、入れ代り立ち代りしてこの窓に現はれる。

彼女たちの行末を宿命的に考へると、些か胸の詰まるやうな思ひがせぬではないが、そんなキレチメントルなことを云つてはゐられぬ。

素人娘がハズの選り好みをするやうなわけにはゆかぬ彼女たちである。

對手が酔拂ひでも、間拔面でも、或ひは又垢臭いよれよれの着物を着た乞食同然の男でも、金を出すからと云へばグウの音も出ぬ籠の鳥だ。

これが廓なら身なりでもりゆうつとしてやつて来るが、腹がけ姿にゴム靴をぬいで上りこんでくる客にさへ、大切な體を委せねばならぬ。

「妾しの望みといふのはねえ。」



と、娼婦上りの年増女がいふのである。

「たとへ九尺二間の棟割長屋でもかまはぬから、赤ん坊抱いて亭主をそばに、川といふ字に寝て見たいの！」

荒み切つた心の中に、たまに描く淡い空想さへ、女はやはり女らしい。

家の名は忘れたが、この街、静子といふ快氣たつぷりの女がゐた。

眼の澄んだきりツとした顔付をしてゐるが、持前の快氣は附近でも評判もので、一旦つぶれかけた抱へ主の家を、ぐつと再び引起した程のはやりつ見、それだけに後には我儘もきくし、嫌な日には家業も休んだけれど、彼女の氣象にすつかり惚れこんだ某大學の學生は、一つは人道主義的な氣持から一つは女を救ひ出してやるといふ英雄主義的な氣持から、毎日毎夜、彼女の所へ通ひつめた。そして彼が彼女に燃えるやうな戀心を打ちあげた時、

「ねえお前さん、お前さんは大學にまで通つてるのだから、馬鹿にしたつて少しは怜悯な馬鹿だわネ。こんなところで、そんな冗談は言ひつこなしよ。妾しなんかに戀するやうな馬鹿ものは、もう

これからは來て要らない。妾の體は腐つてゐるし、妾の心も腐つてゐる。妾しがお前さんにあげるものは、病氣以外になんにもありあしないんだから……」

と、河合もどきに啖阿を切つた。

然し、その辭彼女も矢張り彼を戀してたのである。

後に、この學生がひどい梅毒と淋病で入院し、いろんな不身持が親にばれて學資の送金をたゝれた時、彼の姉となり、彼の戀人となり、時に彼の母代りにさへなつて彼を卒業させたのは静子であつた。

その彼とは誰あらう、今日無産階級の陣頭に立つて、落選こそしたけれど堂々ブルジョア立候補の陣營に内迫して、次の選挙には必ず當選を豫想されてゐる××××氏である。

昔、千束の魔窟で艶名と凄腕とをもつて鳴らしたスベルのお八重さんと好一對の取組である。けれども、滿州から南洋まで股にかけたお八重さんは、その達者な英語のお蔭で外語の學生と戀に落ちたが、後に梅毒性から來たツルツ 禿のカツラがバレて、悲しい別れをしなければならなかつた。彼女の悲運に比べると、静子の前途は大海の如き感がある。

さて、話しが脇道にそれたが、静子のやうな幸運兒は千に一人か萬に一人だ。忌はしい病毒の腐肉を店先に晒して、少い日でも四五人、多い日は二十人近くの客を取る彼女たちが、身も心もヘトヘトに疲れるのも無理もあるまい。

客の取れない女は減食の制裁があり、病氣で打倒れさうになつても、苦痛を羞恥の表情に變へて、好色の男をたぶらかさねばならぬ。——晝でも夜でも牢屋は暗い——囚人が唄ふ悲しい歌は彼女たちの境遇にもピッタリ嵌まるが、ひどい睡眠不足をこらへて、彼女たちは晝間でも夜と同じやうに、人の顔さへ見れば、

「チュツ、チュツ、チュツ！」

と鳴いてゐる。昔のやうに、通りすがりの男を家の入口で取つかまへては

「おはいりと云つたらおはいりよ。何と言つたつてもうこの手は放さないんだから、さア、強情を  
はらないで、さつさとおはいり……」

てな工合に行かなくなつたので、この眞泣きゝ眼の表情が現在の彼女たちには唯一の武器だ。安く

て簡便で公衆食堂に入るやうな氣安さはあるが、安いだけに多くの危険が伴ふことも考慮に入れておく必要があらう。

又、對手はたかの知れた淫賣だと侮つてかゝると、どこでどんな凄惨な眼が光つてゐないとも限らぬ。銘酒屋抱えの用心棒は、何かことあれかしと鴉の眼鷹の眼で狙つてゐるのだから、たちの悪い奴に出會すと飛んだ災難にぶつかるかも知れないのである。

かうした魔窟にもちやんと同業組合なるものがあつて、警察との交渉や、いろいろなゴタゴタのあつた場合には、組合の幹部が東奔西走して解決の任に當つてゐる。

又、さうした設備がなくて、龜戸に約千人、玉の井に約千五百人からゐる私娼の統制は保てない。玉の井にしても、地勢から云へば極めて便利の悪い郊外である。殊に玉の井など淺草から私營鐵道に乗つて約三四分、廣漠たる武藏野の一角の小さな街にすぎないが、それでも一日の乗降客一萬を下らぬといふから、年若い都會人が如何に女の肉に飢え切つてゐるか、想像出來やう。

吉原の廓が淋しいのも、一つはこの私娼の勢力に手痛く壓迫されてゐるからに外ならない。

なればこそ、氣の利いた道具と云つては何一つない銘酒屋の権利が、千圓も千五百圓もするのである。

うまく行けばこれほどボロイ商賣は稀である。懐手をして長火鉢の側でボカンとしてゐても、金は次から次へと客がをいて行つて呉れるのだ。一人の女が一日十圓稼げばその六割と見て六圓、二人なら十二圓、二人ゐると悪い時でも月に三百や四百の金は轉がり込む。仕事の嫌ひな野郎間の男が、只一心に銘酒屋の女將おかみを女房にしたがるのも無理はなからう。

けれども、かうした女を妻に持った男は、妻が平然として客の座敷に奉仕するのをぢつと我慢してゐてゐるだけの雅量が必要。少し客が立て込んでくると、たいいていの家で女將も酒の相手位のつとめをし、亭主は階下でチビリチビリと男酌で呑んでゐなければならぬのである。

それ程いゝ商賣なら誰でもやりさうなものだがさうはゆかぬ。新規開業は警察でも許さないし、無断で銘酒屋でも開かうものなら、安く見積つても片腕の一本は叩き落されて了ふのである。

不惑なのはかゝる暗黒街に落ち込んだ私娼だ。五百圓か六百圓の前借で身を沈めたが最後、不死身

同様の體面をもつてゐなければ永久に浮はれない。半ば色魔みたいな女が、自から好んで私娼になつても、一ヶ月頑強に持ちこたへたる者はゐないといふ。一人前の私娼になる迄の慘酷たる辛苦は、落ち込んだ本人でなければ到底筆では書き現はせない。

凡ゆる侮辱を忍び、女性の持つ羞恥の念を悉くかなぐり捨て、病毒、病毒で全くの腐肉になつた體を、飽迄支へ切つて免疫性の體にしてしまふまでには、前借以上の負債が自分の背中に巨岩の如く負ひかぶさつてゐるのだ。

たとへて對手が純眞無垢な中學生だらうと、欺して欺して欺し切れるまでは欺かねばならぬ。それとも知らず、最近學生がこの方面に繁々と出入する様になつたのは、取締り當局でも全く手を焼いてゐるらしい。

時々一齊檢舉をやつて懇々と意見しても、咽喉元の熱さを忘れると又性懲りもなく出かけてゆく。かうして命を的に稼いでも、彼女たちは一圓以上小使は與へられない。それは抱え主の方で逃走をするのを恐れるためであり、又、中には前借をとつて直ちに逃走する海千山千の女さへゐるといふ。

さて、公然の秘密の魔窟はこの位にして、もつと違つた場所を紹介しやう。

そこはプロレタリアの最下層の住む本所の小梅菜平——町の名前から受ける感じは淡い三笠の爪弾でも聴えさうな感じがするが、これが有名なイースト・サイドの大木賃ホテル街だ。淺草から并妻橋を渡るとすぐに大きな灯の町が現はれてくる。電車通りの裏側にはいると、いやあるわ、あるわ。

昭和の今日店先に角行燈を下けた二階建の薄汚い宿屋が凡そ百數十軒。

けれども、夜の暗がりは何といふ有難いものであらう。こんな不潔な街でも、さながら色街いろまちそつくりの觀を呈して來るのだ。

自由労働者や失業者にとつては、これでも彼等の別天地である。ホテル住店と云へばたいしたもの、一泊料二十五銭も三十銭も出してゐると云へば、僕たちが洋行して一流のホテルに投じてゐる程の贅澤ぶりだ。

そとへ行燈に麗々しく「木賃宿」と筆太に書かれてゐるやうとも、彼等にはそれがネオンサインにもまして壯大な感じがするであらう。

四疊半の店の間か、真中に廊下があり、破れ障子を蔽めた寢室がズラリと奥深く（と云つても三四間だが）並んでゐる。

奥の突當りにはどの宿家にもバスがある。バスといふと體裁がいゝが、ジャブジャブと水を浴びるにすぎない。

かうしたホテルにもちやんと等級の差別があつて、特等を別間と呼んで、雜魚寢をしないですむのである。従つて料金も四五十銭から六七十銭まで、その家の構へによつて多少の相違がある。

この別間にふんぞり返つてゐる人間こそ實に大衆の羨望の的だ。

プロレタリアのうちの高等高等級がこの買切りを斷行するのであつて、別間といふところに面白味があり、エロの花が開くのだ。

この別間を利用する輩は、上京したばかりの女を言葉巧みに欺て連れて來た誘惑者や、貧乏長屋の戀人同志、時には相當の地位にある人たちまでが利用するといふから、木賃ホテルだとして馬鹿に出來ない。

つまり、別間といふのは秘密室ともいべき性質のもので、そこから喋々噂々の私語が洩れることは階下の大家にとつては我慢のし切れない苦しみである。

然し、その特別室と雖も青疊が敷いて、床があつて、床にはちゃんと生花など活けてあると考へたら大間違ひだ。

蒲團は上下ともメリケン袋、赤ちやけた障子、壊れた壁、壁の隙間からは南京虫や虱がよき敵御参なれとばかり襲撃してくるから甚だ情けない。

いかもの喰ひの好きな人は、時々このホテル街に浸入して、プロ的享樂を流るのであるが、身なりのいゝ恰好などしては、絶対にそこらに巢喰ふ女は寄りつかない。彼女たちも亦お役人と云へば鬼より恐いし、すつきりした風采の人は皆お役人のやうに考へてゐるのであらう。又、木賃ホテルにしたつて、一夜泊りの客にさう簡單に女の周旋などしては呉れないから、屢々出かけて馴染になるか、五日か十日滞在してからでなければ目的は達しられない。

銀座のストリート・ガールとは人世觀も社會觀もまるで違ふのだから止むを得まい。

更に甚だしいのになると、××工場附近の土管の中で貞操を賣つてゐる密淫賣の一團がある。土管からヌツと首を突出しては大膽に男を誘惑するのであるが、巡回の警官などが來るとモグラのやうに首を引込め、チヨロチヨロツと機敏に奥へ姿を消して了ふ。

一人の女が首尾よく男を喰へこむと、時には猛烈な仲間喧嘩となることもあるし、金錢問題を離れて男の爭奪戦を演じることもあるといふ。

市役所社會課に席を置く某氏は嘗て歎じて曰く、

「ひとたびどん底社會の仕事に従事すると、社會改造とか社會革命などいふことは雲を掴むやうな氣持にさへなりますよ。そんなことはとても出來ない。それよりも、あれだけ不幸な人間を今のまゝで喰ひ込めてやりたい。あれ以上不幸にさせたくないといふ考へしか僕たちにはどうしても出來ませんネ。」

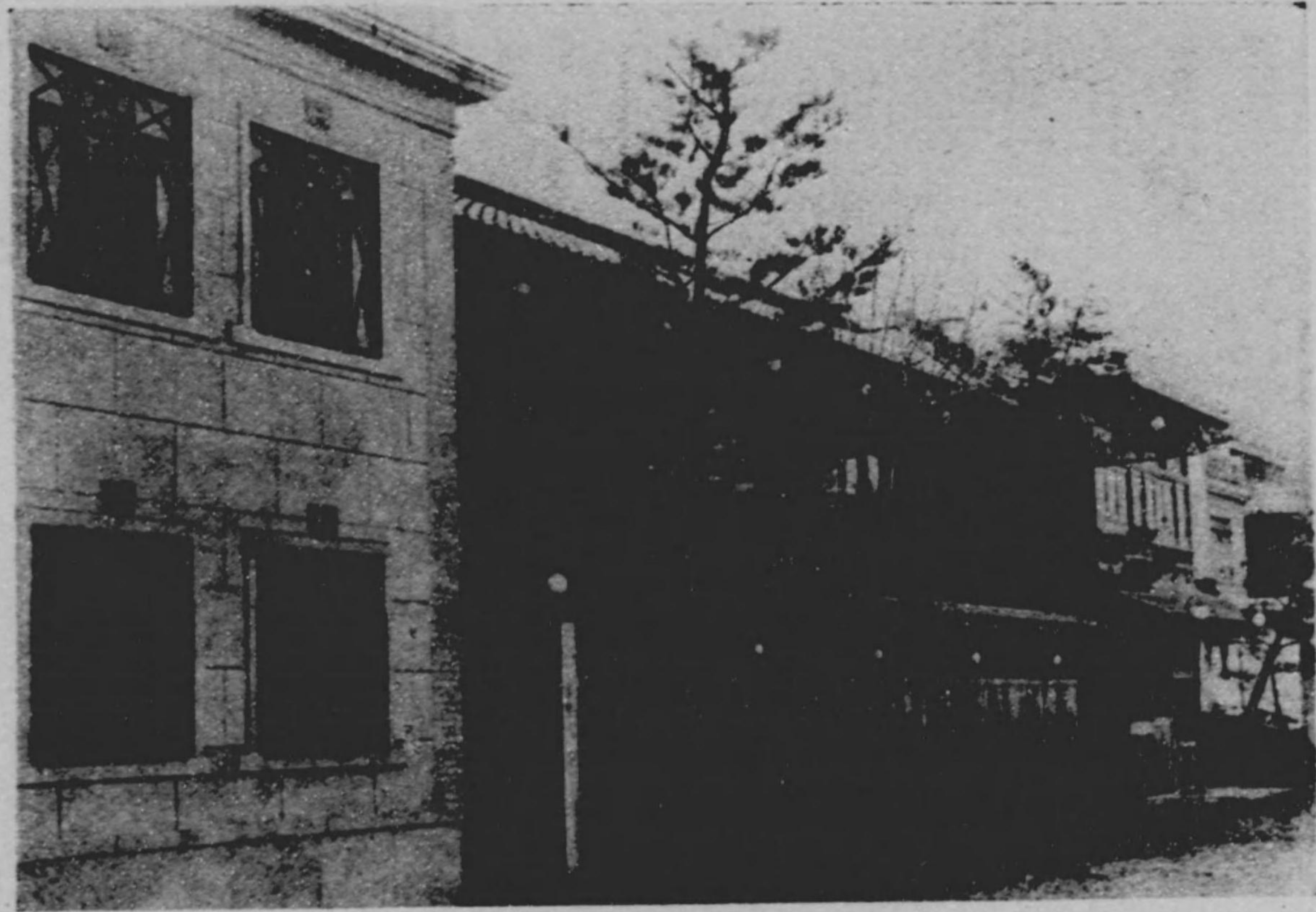
と、僕はプロレタリアの運動のことは少しもわからないが、或はそんな氣持になるかも知れない。いやに、理屈つばくなつたが、兎まれ賣春婦がその形を變へ、その様式を變へ、或ひは實際的な方

法を巧みに轉換させつゝ、異常な力で東京市の内外に披瀝しつゝあることは、噫かし當局者の頭痛の種になるであらう。

最近著しく發展した荏原町小山附近・中央線の高圓寺、山手線の池袋、その他、ありと凡ゆる新興地帯を歩いて見給へ。歩いて見給へと云つてもボンヤリ歩いてゐたのでは駄目だけれど、酒を呑んで金さへ見せれば、歡樂街の女は女の方から旺んにモーションをかけて来る。

不景氣、不景氣、この不景氣のつゞく限り、女の露出狂はいよゝゝ高潮の度を増してくるばかりであらう。

## 第二編 大阪歡樂郷案内

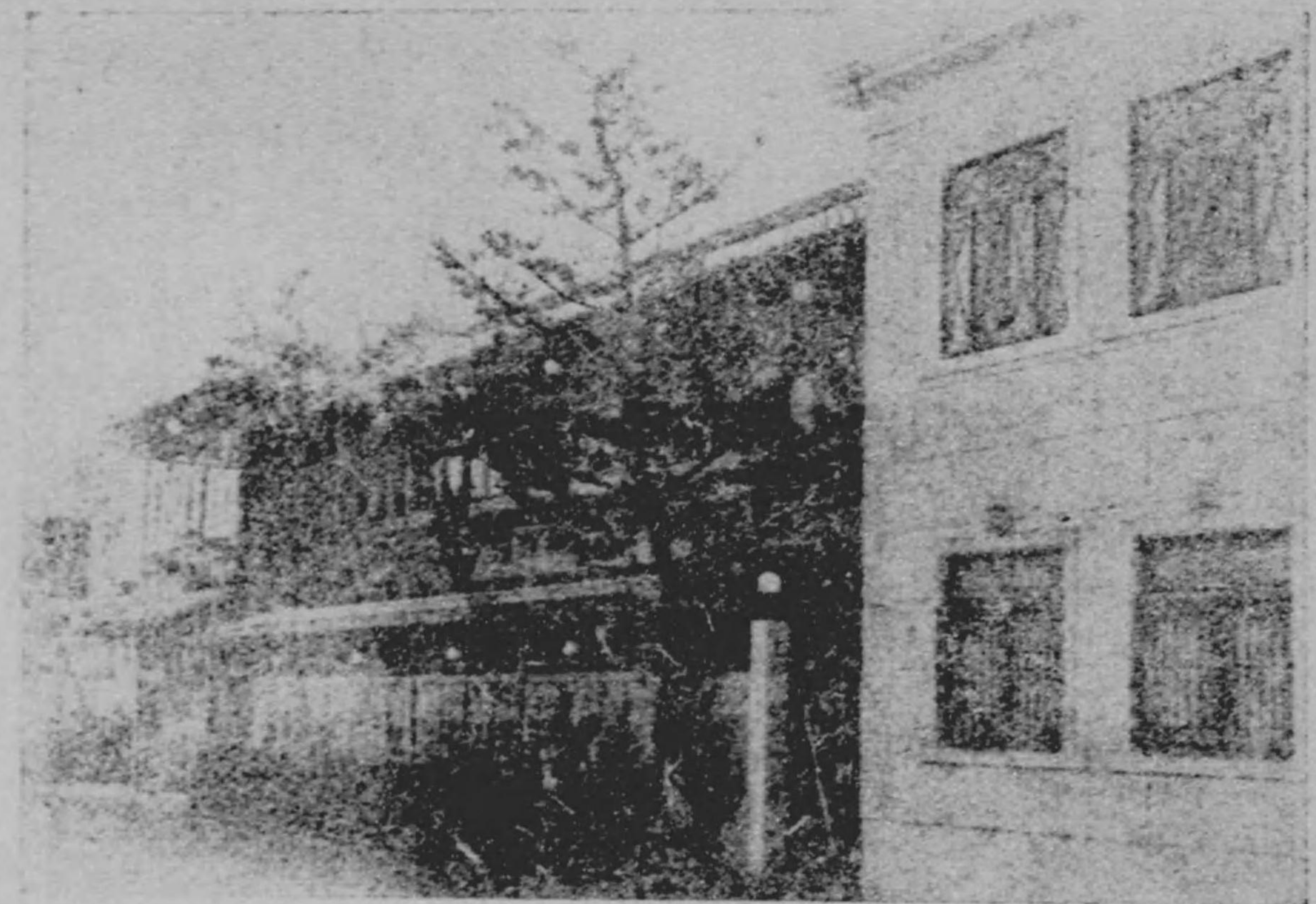


大阪飛田遊廓御國樓正面

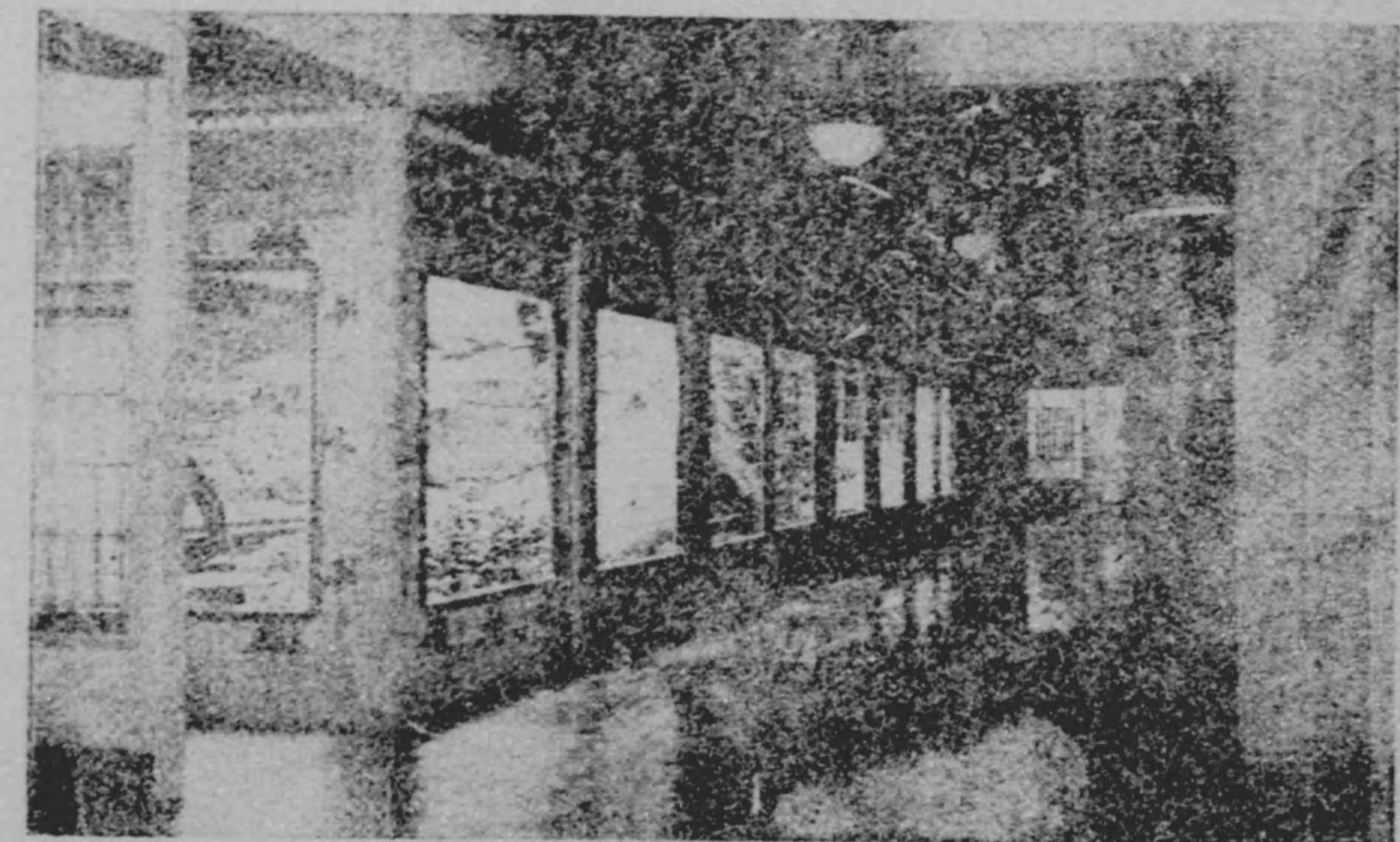


國樓內部

第二章 大遊廓樂隊案内



大阪府庁舎



内務省

第一章 道頓堀

人間の頭数からいふと、兎に角大阪は日本一の大都會である。

経済的な見方をすれば、これ又日本一の大商工業都市である。

上方の贅六ども喜ぶまいことか。

「そらなんちうたかつて、大阪が日本一やもんな。」

さて、その日本一の大都會は、産業資本家の密集地帯だけあつて、金といふものに對する考へ方が他の如何なる土地よりも發達してゐる。人間が金を支配する時代が過ぎ去つて、金が人間を支配する世の中になつたが、その最も代表的な都市は大阪であらう。

だから市井の人の日常の挨拶でも

「どないだす。此頃はよう儲かりまつか？」

といふのが一種の合言葉だ。



背越しの金を使はぬと誇つてゐた江戸つ兒氣質も、金の方面では今や完全に上方の贅六に一步を譲つた。

「金はジャンジャン儲けてジャンジャン使はなけあ嘘だんが。」

まことによく大阪の人間は金を使ふが、儲けることにかけても抜目がない。

所謂、算盤だまを弾く能力に於ては、遺憾ながら到底東京人の敵ではないのである。

大阪の歌樂舞が今や東京のそれを凌駕せんとしてつゝある形勢も、その歸趨するところはつまり大阪商人の頭の働きがすばしいからに外ならぬ。

過ぐる關東の大震災によつて、東京の人々が華美と流行とを大阪に追拂つてからといふもの、工業都市としての大阪には、エロとグロの世界が徐々にその翼をひろけて行つた。

かくて、昭和の時代に入つて一時にバツと開いたエログロの書は、こゝに百花満開の燦爛たる美觀を呈してそのクライマックスに達したのである。

では僕たちはどんな花から摘みとつたらいいのであらう。

先づ大阪の夜を彩どる最も美しい花、關西つ兒が鼻の先を齧めかして自慢する道頓堀から入つて行かう。

赤い灯、青い灯、道頓堀の

河面にあつまる戀の灯に

なんでカフェエーが忘れられよか

これは道頓堀行進曲の一節だ。

又、昭和三四年に全國津々浦々に流行した浪花小唄には

燃えて火となる私しの心

こがれこがれりや火ともなる

テナモンヤナイカ〜道頓堀よ

いとし糸ひく雨よけ日よけ

かけた情けを知りやすまい

テナモンヤナイカ〜道頓堀よ

とある。

四季を通じての道頓堀の賑やかさはダンゼン大阪一であり、道頓堀のつての大阪だ。面積は別として、その構成からいふと道頓堀ほど纏まつた歌樂舞は日本にはない。

銀座と浅草と築地を一緒にして、その側に新橋を加へたやうな道頓堀。

なればこそ僕の悪友であり、船場問屋のドラ息子瀬川均が僕に向いて威張るのである。

「日本歌樂舞を書くんやつたら、そらどうしても道頓堀を日本一にせにやあかんぜ。」

あかうとあくまいと餘計な世話だが、瀬川のいふ處を聴けば

「お前がどない云ふたかて、道頓堀よりえ〜とこ日本にはあらへん。銀座がえ〜の浅草がえ〜のいふても、そらほんまに比較にならんぜ。そやないか、銀座はデパートとカフェーのけたらあとになんにもあらへんし、浅草にゴチャゴチャと安もんばかり並んで、壽司屋の陳列そつくりやないか。」

資六のくせに鼻息はなか〜荒い。

なる程、さう云はれてみると、一等八圓の雁治郎の芝居もあれば、入場料十錢の寄席もある。

戎橋から日本橋まで僅か二丁そこそこの道のりではあるが、前後左右を包含しての道頓堀は、そこに一大歌樂舞としての凡ゆる機關が備はつてゐる。

この光彩陸漣たる状景を一度に表現することは出来ないから、兎に角道頓堀を中心として、隣り合せの宗右衛門町、芝居裏から法善寺境内附近へかけての状景を分割して説明した方が便利であらう。

## 第二章 道頓堀の劇場

ここも亦御多回に漏れず松竹の獨り舞臺である。戎橋の西詰にある松竹座は、その豪壯優雅な點に於て映画劇場としては大阪一、いや大阪人に云はすと日本一、自家用の高級自動車がずらりと車寄せに並ぶところを見ては客筋の如何が窺はれる。

スマートな男女ふたり連れれの客が、三々五々と澄しこんで階段を上ると、その後ろからは若い女學

生が恥しさうに面を伏せて昇つて行く。

なにしろ大入の日など一日一万圓に達するといふから素晴らしいではないか。甚だ失禮な言ひ分かは知らないけれど、關西娘がこゝ数年來の間に、すっかりモダン姿がイタについて来たのは映畫の力によるところが少くない。

戎橋を渡ると浪花座、中座、角座、朝日座、辨天座といふ順序に、古風な大劇場が道頓堀の色彩を一層華やかに飾つてゐる。

これ等の大劇場もいつの間にか松竹の手に轉がりこんで、浪花、中、角の三座では年中一流歌舞伎や、新派、喜劇などが夥しい客を吸ひこんでゐる。朝日座と辨天座は映畫専門の劇場となつたが、これらの六座から日々松竹の懐に舞ひ込む金は、二萬圓から二万五六千圓に達すると云はれてゐる。一日二萬圓だとすれば月に六十万圓、一年には七百二十万といふ莫大な金が、雁治郎や、延若や、中車や、それからチャンチャンバラバラの阪妻や、色男の長二郎や、松竹座の飛鳥明子のすんなりした足や、惣道禿の株主たちのためにバラまかれるのである。

役者が干ほしになつて、映畫監督の頭の下がカラカラに乾くやうにならなければ、日本には不景氣風なんていふものは吹きつこない。雁治郎の藝や、長二郎の顔をあれこれと氣を揉んでゐる間は、まだまだ天下泰平、國家安全であるのである。

杓子が耳かきにならないと同じやうに、忠臣蔵や辨慶はパンの代りにならぬ。

### 第三章 芝居茶屋と裏表

新ルネッサンス式だ。ネオンサインだ。ジャズだ。ブルーズだ。タンゴだ。スピート時代だ。いやなんやかやいふて道頓堀が刻一刻モダン化してゐる。さなかにあつて、ひたすらに古くからの傳統を守つてゐるのが芝居茶屋だ。自からを時代遅れの商賣と知りつゝも、撫然として近代主義の急速なテムボを呪ひながら

「ほんまに道頓堀の人間いふたら無粋な奴ばかりや。」

とこぼしてゐる點に一入哀れさを感じるのである。

古い言葉でいろは茶屋、新しい呼び名で前茶屋ともいふ芝居茶屋とは、云はずと知れた芝居の案内店。

屋根のない小屋がけ時代にこそこの商賣は必要であつたが、雨が降つても傘さへ無用にならうといふ時勢には極めて不向な商賣だ。

前賣切符は電話一本で用が足りるし、入口で切符を求めても結構間に合ふのに、何を好んで餘計な手数をかけてまで芝居茶屋の手を経る必要があらう。

それでゐて、この芝居茶屋なるものが道頓堀には十五六軒ある。(明治以前は四十六軒あつたとのこと)。

大吉、兵忠、三龜、松川、高砂外十一軒。

この十六軒の芝居茶屋の得意先が、大阪中にどの位あるかといふと、明確な數字は現はせないが、逆も千五百軒とはあるまい。

顧客は一年毎に減るばかりで、繁昌する店で二百六七十軒、少ない店では三四十軒位しかないのも

ある。

芝居茶屋を経ての観劇が、普通木戸口で入場料を拂つて入るよりずっと高くつくのは分りきつたこととで、第三者が考へると見榮を張るといふ以外に全く云ひやうがないのである。

見榮を張る位なら、前賣切符で自家用の自動車を正面玄関に乗り捨てた方が遙かに氣が利いてゐるではないかといふ御仁もあらう。

けれども、實際は見榮を張る外にもつと重大な意義があるのだから、時代錯誤の代物だなどと迂闊に笑つてはゐられない。

表面から見ると、芝居茶屋は只ありふれた休憩所にすぎない。芝居茶屋にお茶子といふ案内女がゐる、顧客の座席に坐蒲團を敷きに行つたり、幕合の食事の御用を伺つたり、客のために席のいゝ場所を取るやうに努力するのがその役目である。

然しそれは表向のこと、裏は又裏の仕事があつて、この裏の仕事こそ僕たちの見逃せない重大な點である。

先づ僕たちは芝居茶屋の家の構造からよく見ることにしやう。往來に面した母家の裏側には、大抵の芝居茶屋が下屋と稱する離家をもつてゐる。

長い廊下や、三疊又は四疊半の小室がふんだんにある。襖は勿論一つ一つ締め切られて、寒中などは絹蒲團をかけた炬燵もある。

下屋の裏は清の崖に面してゐるから、もとより通りすがりの人が覗いたりなどする憂ひは微塵もない。

風呂場や便所もふちこちにある。

いつたいかうした設備がなぜ芝居茶屋に必要なのか？云ふまでもなく芝居を見るお客にんの爲に必要なのである。

夫婦連や、兄妹や、親子が来た場合には表の休憩所だけで結構であらう。

芝居へ来る位なら入浴をすんで来たであらうし、コテコテとお化粧もして来られたであらう。

けれども、芝居へは必ず女房を連れて行かねばならぬといふ規則もなければ、夫と一緒になければ

世の凡ゆるマダムは芝居が出来ないといふ習慣はないのである。

デブプリと肥えた爛熟朝のマダムが、二枚目に出て来るやうな若い男を連れてゐるからとて、劇場の方では決して入場を拒むやうなことはない。

僕なら僕が想藉の若い美しいお嬢さんと中座に行つたとする。開幕までにはまだ相當の間がある。彼女も僕も退窟である。

然し、劇場の木戸口から入場料を拂つて入つたのでは、せいぜい休憩室の安樂椅子で二人ともオゾオゾしながら、

「まだ始まらないのでせうか。」

「いやもうすぐでせう。」

と、こんな會話を取り替す位が關の山であらう。又、芝居が閉ねて往來に出ると、

「どうせ十二時頃迄に家へ歸ればいゝでせう。まだ早いから何處かでお茶でも呑んで行きませう。」

「さうねえ。」

と女は半ば當惑さうに答へるのが異常な努力である。これは必ずしも僕と彼女に限つたことではなく、諸君のうちの唯かと女給でもいふし、イット百パーセントの奥様と、若いヤルクス・ボーイの場合だつて同じである。

諸君、然るにだネ。さうした場合、つまり單に退窟だけでは氣のすまないやうな場合に、芝居茶屋を利用してゐると、二人の會話はもつと生々した、もつと威勢のいゝ、でなければもつと極りの悪いやうな文句と表情とが、この四疊半の部屋で取り交されるであらうことを想像して見給へ。全く、高いからとか安いからとかいふ問題を遙かに飛び越えた楽しい部屋になるのである。

さて、さうなると一から十まで加才のないのがお茶子の役目。少々高い聲で話しても外部に漏れないやうな部屋へ案内して呉れるであらうし、のみと云へば槌をもつて来る位に氣轉を利かして呉れるであらう。

社交婦人が芝居がなによりもお好きなのは、只單に、延若のあの逞ましい筋肉や、雁治郎の鋭つほい藝に恍惚するのが楽しいからではない。芝居茶屋の奥深い部屋の味がいつもいつも、痛痒いやうな

惱裡をチクリチクリと刺戟するからである。

御主人は芝居が嫌ひでも、奥さまが非常にお芝居すきの家庭がどんなに多いかは、敢て彼家と此家それからあの方もなど、餘計な例を引くほどのこともあるまい。

さうしたい、お客を掴んでゐるお茶子は幸せである。

「妾えの來たこと内密にネ。」

と、そつと握らされるチップも手の切れるやうな五圓札。

かと思ふと、妻君の前では一年中一日として暇のないやうな振をする会社の重役が、前につんのめるやうな腹を突き出して、ヨチヨチと芝居茶屋の廊下を歩いて御座らつしやる。連れの女が、彼の娘のやうに若い女であることは断はるまでもなからう。

同じ芝居を見るのでも、粹と不粹とではこれだけの相違があるのだから、芝居茶屋が無用の長物だなどいふのは以ての外の愚論である。

芝居を見る前、芝居を見た後、高鳴る胸を押へて嘯々と語る楽しさは又格別である。金の光りは七

光り、人はわけなくして金を呉れとは云はないのである。

あぶく銭のある人は大いに芝居茶屋を利用されるがよからう。

前宵切符だ。プレイガイドだ。おまけに芝居がいつの間にか映畫館に早替りするので、芝居茶屋は踏んだり蹴つたりの惨めさである。お得意になれば盆暮の贈り物もあるし、毎月毎月プログラムだけはイの一番に送つて呉れる。

一幕見がスピード時代の門前だなんて、そんなつまらない所へ力瘤を入れるのは止して、もつと違つた所へ力瘤を入れるべきである。

「そない云ふたかて、連れて行く對手がなけあ阿呆らしいが……」

なる程、戀人も情婦の一人も持たぬ方はかう云つて尻込をなさるであらう。

然し、男子たるもの尻込はあらゆる場合に禁物である。

芝居茶屋から數歩足を運べば、表通りには仄暗い電気スタンドの側、蒼い灯のシャンデリアの下にエロエロ女給があぶく銭の持主を今や選しと待ち構へてゐる。交渉次第によつてはどんな場所へでも

お供する最も現代的な職業婦人、女房の如く見せても、娘のやうに装つても、それは諸君の隨意であるから、轉んだ拍子に馬糞を掴んだつもりで、當つて碎けるだけの勇氣を奮ひ起して欲しい。

「どうや、今度の中座はえらい評判やぜ。成駒屋を見せたるが一緒に行けあへんか。」

とおめづ隠せず真向から斬り込んでみる。手に一つや万が一

「ほんまどすかえな。妾も見たい見たいと疾ふから思つてゐまひてん。」

と。エプロン・ガールがかう答へたら大願成就、直ちに千萬長者の若様みたいな恰好をして、芝居の始まる二三時間も前から、堂々と芝居茶屋の入口を漕るのである。そして、寒い時ならわざとボケ面をして、

「なんや、まだそんなに早いのか。さうやつたらこんなところでボカンとしてゐても阿呆くさいよつて、もつと温かい部屋へ通してんか。」

と。お茶に命じさへすれば、如才のないお茶子は痒い所に手が届くやうに、萬事ちゃん・呑みこんである。ちやんとしてくれても、それから先の口がきけないやうなものは、これはどうも致し方が

ないから、道頓堀の土左衛門にでもなつた方が氣が利いてゐる。

「えらい寒うおまんす。」と女から云はれて、

「うむ寒いな。」

と、懐手をしたまゝ答へるやうでは、女の方でも二の句がつけまい。と云つて、

「なんぞ寒うない工風はないやろか。」

などと答へたのでは、それこそ女を益々身顛ひさす以外に何の効果もないことを心得てをかねばならぬ。

閑話休題、次は道頓堀に咲き匂ふ燈下の花。エロく女給の探索に出かけやう。

「君の好きなものはなにか？」と訊かれたら、

「二番目が酒だ！」とかう僕は答へる。

なにはさてをいても一番目の方向へ……

#### 第四章 道頓堀のエロ女給

道頓堀のエロ女給、その名は今や天下に響いて、モネやモダの血を湧き立たせること一通りではない。

道頓堀の色彩が著しく近代化したのは、これ即ち大カフエーの進出と、夥しい女給群の浸入と、それに引きずられて、ジャズや踊りが後から後から流れこんだお蔭である。

カフエーと云へばニキド面の青年が、咽喉の鳴きを止めるのに一杯十銭のコーヒークを啜、所位にか考へなかつた中老連も、今ではどうして。若いものそちのけの巫山戯きつたていたらくである。

嘘だと思ふなら道頓堀のカフエーを軒別に覗いて見給へ。

若い者の神妙さに比べて、中年男や老年に近い禿頭連が、好色成語でも見るやうな場面を洒々として僕たちの眼前に見せつけるのである。

「かう見えてもわいはまだ若いので。なにもさうツケツヤせんかつてえゝさかい。もそつとこち



らへ寄りな。なる程え、肌や。こゝんところギユツと一べん握らひてンか。」  
酔つ拂つた元気で、グツと女給の肩を抱きすくめたモチもあれば、馴染客に勇敢にしなだれかゝつた女給もある。

「今度こそ嘘いふたら承知しまへんぜ。いつにしまほう。早うきめんと又氣が變るといけまへんよつて、一緒に行く日きめときなはれ。どうせ休むんやつたら一日休んだかて二日休んだかて、そんなことかめへんし。あんたの云ふことやつたら妾えなんでもきくさかい。だますのだけは勘辨しくんなはれや。」

「うまいこといふない。お前がどなたでいさいのえきこといふたかて、わいはちやんと知つとるんやぞ。お前この間寶塚へフーさんと一緒に行つてその晩かへらなかつたらう。お前がどこへ寝て、どんなことして来たかまでチャンと調べてるのやさかいえらいもんやろ。」  
女給は眞緒になつて俯向いたが、それでもテレ臭いのを耐へて。  
「そんな見て来たやうな嘘つくもんやおまへん。」

と、相手の膝のあたりを掴つてゐるのがしほらしい。

今でこゝ禁ぜられたが、あの紫光色の電燈で室内の明るい光線を遮ぎつた心使ひは嬉しいものであつた。

軽快なフリリッピン・ジャズバンドの音に耳を傾けながら、女の細い腰を抱いてジャンジャン酒を呑む気分は悪くない。

赤玉、口輪、ユニオン、美人座など、揃ひも揃うて女給のサービスはズバ抜けてゐた。

愛想がよくて、障りが柔かで、少々無理に對しても柳に風と受け流す風情に至つては、そこに關西女獨特の情趣がある。

實際、夜の道頓堀川からこれらのカフェーの状景を眺めて見給へ。殊に夏の夕暮など女給の姿が淡い燈灯の間にチラホラして、浮き立つ様なジャズの流れが耳朶を突いてくると、もうぢつとしてはゐられなくなる。

ケバケバしい點、ウインクの巧みな表情、ハツキリした態度、さうした點に於ては東京のエプロン。

ガールには叶はないとしても、エロチシズムに對する隠せない態度に至つては、關西の女が遙かに大膽で卒直である。

これは學生やモボが東京に比較して遙かに妙いのと、彼女たちの許へ詰めかける客がその大半は中年の男であると云ふことに基因してゐるのかも知れない。

ちよつとした會話もすぐにエロの方に轉向し、客のピントも亦そこに向けられてゐる。而も可なり赤裸々に。

又、それ故にこそあの夥しい客が道頓堀のカフェーに惹きつけられるのだ。カフェーの繁昌するのはその料理が美味であることよりも、どんな女給があるかに依つて決定される。

勿論女給は美人でなければならぬ。美人であつてもサービスが悪ければ プラスマイナス で零になる。けれども、今日では單なる御叮嚀主義のサービスは客の心を惹きつけない。いくら叮嚀でも女給が令嬢や貴婦人のやうにスマしてゐたのでは客の腰は落着かないのである。

ちつとやそつとお役所の取締りが八益しくとも、經營者が女給に對する態度を極めて寛大にすると

ころに客を惹きつける原因がある。料理や酒を運んで来た女給に、すぐ隅つ子の方へ送けられたのは、お客にとつては退窟な場所へわざ／＼退窟しに來たやうなものだ。

その點道頓堀のカフェーは實に要領がい。女給が客こいちやつくのはそれは女給の勝手である。女給が客に接吻させたからとて、その爲に店が損をするといふわけでもないから、エロ戦線の展開には殆んど見て見ぬ振りの態度である。これは道頓堀に限つたことではないが、場内の景團氣が銀座のそれに比較するとすつゝ氣樂なことだけは争へない。

このコツが多くの客を吸引したゞけに、それに伴ふエロ問題も頻繁であつた。

そこで考へ出したのが女給の缺勤に對する罰金である。一口に云へば、經營者の方では女給に對して次のやうな訓辭を試みたやうなものだ。

「おまはんたちが休むことそれあかめへん。君たちの體まで買ひとつてるのやないさかい、誰と寢ようが、誰と他處行しやうがそらおまはんたちの勝手やがな。だけど店休まれるさうとやつぱり俺の方でも困るよつて、休んだ人からは一日二圓の割で罰金出して貰ひたいもんやナ。」

なんと慈悲深い、抜目のない寛大さではないか。鋸一文の給料も拂はない人間から罰金を取つても取られる方では喜んでそれに應じる。なぜなれば、罰金はお客はんがチャンと背負つてくれるから。

「どうや、一ぺんよそ行きしやうか。」

「え、行きまほう。だけどあんた罰金だして呉れなきやいややし。」

「罰金でなんや。」

「あら罰金いふたら罰金だんが。店休むには無料で休むわけにやいきまへんネ。」

「ほう、さよか。その罰金いくらや。」

「二日二圓やわ。」

「ふう、えらい安い罰金やな。二圓ぐらいなんでもあらへんがナ。」

ほんまに二圓位なんでもあらへん。安いものである。

罰金を拂つても消頓堀の女給たちは頻繁に外出した。ユニオンの踊り子たちは、男子と一緒に出かけるのを見られると、もつと高い罰金を拂はされたと聴くが、それとて女の腹が痛むわけではなく、

なかには月に三十圓以上の罰金を拂つた女もるといふから、彼女の發展ぶりと、店の繁昌ぶりが想像される。

酒や料理が賣れなくても罰金だけで結構喰へる。

だから試みに消頓堀のカフェーの前に立つて見給へ。あり餘る女給がゐても、女給募集の立看板はいつも店の前に晒されてゐるから——。つまり募集する端から女給が雲隠れして了ふ證據が如實に表現されてゐるわけだ。

或る大カフェーなどに至つては、百人近い女給が連名して産兒制限協會の相談所に入會を希望し、子を産まない方法を構じて貰はふと訴へたといふから、圖々しいのもそこまでゆくと愛嬌である。協會の方では之を一笑に附して拒絶したが、女給が制限しなければならぬ程子を産むのかどうか？多分産むのであらう。

すべての女がさうときまつてはゐないが、消頓堀には凄腕の女給が多い。男と一緒に外出することを、妻が夫と連れ立つて外出する位にしか考へてゐないのだ。

従つて、さうした感染力はすぐに第二の女、第三の女へと傳はつて行き、甚だしいのになると、初めて會つた男と外出の約束をして、その二日後に間違ひなくそれを實行したといふ餘りにも尖端的な女さへゐた。

又、道頓堀の女給を喰物にしてゐる不良カイドも澤山ゐて、これらの一團は築港附近に網を張る。船員が上陸する時間をみはからつて、潜行的な誘惑を試み、殊に對手が外人となるとべら棒な金額を捧ぎあける。

某カフェーにゐるM子といふ女などは、自分から進んで外人にだけ體を提供し、いろいろな外人に接するのを一種の獵奇趣味としてゐたといふから驚くの外はない。

彼女は日本人は餘り顧みない代りに、外人となら郊外のドライブや、松竹座の映畫見物や、ホテルの楽しい寢室や、その他どこへでも出かけて行つた。

獨身者のくせに立派な家に住んで、次から次へと外國船員を喰へ込んでゐるが、一寸みたところではまたセックスの何ものかをも知らないやうな初々しい顔をしてゐて、身の廻りの贅澤さは恰かも由

緒ある人のマドモワゼルのやうであつた。

横濱生れだと云つてみたり、東京育ちだと云つてみたり、その都度彼女の生れ故郷は變るのであるが、大阪の女でないことだけは彼女のアクセントが證明してゐた。

だらしない姿でホテルに宿つてゐる處を襲はれたときなども、彼女はクロリとして警官に喰つてかかつた。

「あら、外人を戀人にすればそれがどうしていけないの。妾し淫賣ぢやないわよ。戀人と一緒に寢れば警察の御厄介にならねばならないなんてそんなバカけたことはありませんわ。」

警官がどんな證據品を押収して引あげたか、それまでは聴きもらしたが、兎に角M子が二十日のブタ箱に叩きこまれたことだけ事實である。それ以來彼女の姿は道頓堀から消えて了つた。あとでそれを知つた大阪美人たちは、自分たちのふしだらを棚にあげて、

「東京の女は凄うおまつせ。」

は少々呆れざるを得ない。

看板さへ立て、をけば、女給志願の美人は後から後からと變りでも出て来る。おまけにサービス用のマツチからツマ楊子まで女給に負擔させてをいて、罰金の収入が月に九百圓もあつたといふ店があるから阿然として物が云へない。

さてかうなると、客の方では同じ金を使つて、ボンヤリと人のすることを見るのは莫迦々々しい。五度に二度の拒絶は覺悟をして、我も我もと女を連れ出すことに夢中になる。

道頓堀の淫風はかくて嵐の如く吹きまくつた。衣裳と化粧が唯一の資本である女給たちは、互ひにその美を競ふことに腐心する。

A子にいゝ人が出来れば、B子だつて指を喰へて見てゐるわけにもゆくまい。B子が高價な着物を求めればC子もそれ以上のが欲しいのである。

優越感の示し合ひ——その點女といふものは誠に淺はかなもので、チップの五圓も出して呉れる人があると、もう一步進んで體を投げ出せば、きつと五十圓位は呉れるだらう、帯も買つて貰へるし、羽織も買つて貰へるだらう！——と先の先まで考へすぎて、わけも雜作もなく男のなすがまゝに身を

委ねるのだ。

妙に道頓堀の女の壽命の短かさよ！前の晩までゐた女が、その翌晩は何處に消えたものか同僚さへ知らない。

行先の分らない女に來たらブ・レターだつて、却々すくない數ではないが、道頓堀の女にさへ今時ラヴ・レターを出す純な青年もゐるのかと思ふと、不惑でもあつて滑稽でもある。

純情だとか熱愛だとかいふ文字は、十九世紀浪漫派詩人の遺物である。

「人生の幸福はその九割までは金の力にこれを求めることが出来る。」

シヨウベンハウエルはうまいことを云つてゐるさ。一九三一年代の女給は、何よりも先づボンと投げ出された五圓札を尊重しますよ。惚れようか惚れまいかはそれから後の問題である。

「あまりケツタイなこと云はんどいてお呉れやす。」

或ひはかう云つて抗議を申込む女給さんがゐるかも知れぬ。さうさう、一厘のチップも、一圓のお頂目も貰はないで、交代々々に或る若い不良と外泊に出かけた女給さんもウヨノノしてゐましたつけ

ネ。  
この果報な青年は西國の情話作家で、色が淺黒くて筋肉が引締つて、寒い頃にはトルコ帽に茶色のマントを着てゐます。尖端的ではないが變つたスタイル、鼻が大きいのが妙に女給の心を惹きつけるのだとさ。

流石にエロ女給だけあつて眼のつけ所が違ふと、聽かされた僕の方が餘り程移つた。  
ソーダ水や、コーヒー一杯のんでは、五分か三分の間にすらすらすらと女給を承諾さす手腕はたいしたもの。

おまけに女給が貰つたチップを半分借りて、次のバーへ行つて飲む貴度胸に至つては、チップを出した方ではケヤカが惡からう。

お金を貰つて貞操を投げ出せば賣淫である。貰はないで投げ出すのが神聖なラブ。

然し大抵は二刀流の達人だから、ナルベクなら神聖なラブを選ぶに越したことはない。  
もう一人彼の情話作家に負けないエロ傑がある。道頓堀のFといふ活辯だ。

滔々懇川の辯を奮つて艶物映畫の解説をやる彼の整量、そのバツンョネートな名句調、これが女をチャームする資本である。

金儲けのための仕事が女に好かれるのだからい、商賣だ。

「彼女は泣いた。聲を限りに泣きじやくつた。その餘りにも無情な男の心を呪ひ乍ら、暮れて行く森の中で、いつまでも、いつまでも……」

てなことを云つてゐれば、女なんて奴は……いていホロリとなるのだから情けない代物さ。

彼に頼んで映畫を無料で見せて貰ふことは、五十銭や一圓に換へられない誇りである。

女はつまらない所で威張りたがる辯があるから、その弱味をガッチリ掴んだのがFの女性操縦術である。

「いつ見に来てもかめへんけど、あれこれ云はれるとうるさいよつて、誰にも内密にしとかんとかんぞ。」

Fからかう云はれると、云はれた女給はまるで鬼の首でも取つたやうに有頂天になる。Fの方では

どの女にもさう云つてゐるのだが、女にはそれがわからない。自分だけが特別の好意を惠まれてゐると思ふから、彼女の方でも特別の好意を捧げるのである。

カフェーで拾圓も拾五圓も使つてゐる男を見ると、そんな奴はみんな間拔面に見えるといふが、それはさうだらう。

彼のさうしたトリックがバレて、女給同志の間で喧嘩があつたとかないとか云つて、氣を揉んでゐる間接もあれば、Fは色魔だといふ悪評があつても、益々彼に熱をあけてゐる女給もゐる。

「あんな色魔みたいなもの妾え嫌やし。」

と悪口つく女が、すぐに彼の誘惑にかゝるから面白い。かうなると女の方では互ひに悪口を云ひ合ひ乍らも、腹の中ではシノギを削つての奪ひ合ひだ。

それはそれとして、さてこのカフェーなるものは今後どこまで發展して行くのであらう。

娼妓を泣かせ、藝妓にベツをかゝし、待合から料理屋から、縦横無盡に薙ぎ倒してゐるエブロン・

ガールは、實に山羊の群を追ふ猛虎の如き觀があるではないか。

凡ゆる公娼は今や將に危地に突き落されんとして、カフェーなるものを極度に輕蔑しながらも、己自身がカフェーの女給化しつゝあるところが笑へない悲劇である。

現代人の獵奇趣味はもはや金で自由になる女にはだんだん遠ざかつて行く。

公娼よりも私娼、同じ私娼でも密淫賣に對してより以上の興味を感じるやうになつた傾向は、誰が何と云つても争へない事實だ。

満腹に山海の珍味よりも、空腹に麥飯の方が遙かに美味であると同じ様に、立人の女よりも素人の女の方に云ひ知れぬ快味があることに氣がついたのだ。

實際またさうではないか。僕たちが五圓もつて公娼を求めんとすれば、自由なる選擇と、自由になる奴隷化した女がいくらでもある。然し、女給となるとさう簡單には制御できない。若干の努力と、期間と、忍従との苦い快味を経験しつゝ、一步步近づいて行かねばならないのだ。

たとへ二三回の戯れで最後の目的を達したにせよ、公娼と女給とでは、釣堀の鯉と、深い海の底がら釣り上げた黒鯛くらゐの相違がある。

簡單で安直に遊べるからカフェーがいふ時代は既に過ぎた。

大都會のカフェー経営者は、表面的にはどんなに上品なことを云つても、その勝敗如何はひとへに女給の活躍によつて決定される。

そんなベラ様な話があるかないか、疑問のある方はドシドシカフェーの入口を潜つて御覽になつたがよからう。

と云つて、僕はエロを宣傳するためにこんなことを云つてゐるのではない。

現代人の動きをそのままに表現してゐるのだ。ダンスアツが風紀取締りにどの位効果があるものか僕には分らない。けれども、ダンスアツがある度に商賣人といふものは恰愒になる。あの手でいけなければこの手、この手でいけなければあの手と云つた工合にネ。

風俗を素すのは女給が悪いのか、それともお客の方が悪いのか？

露と尾花の喧嘩である。

露は尾花と寝たといふ。尾花は露と寝ぬといふ。いや寝たと云ふ。寝ぬと云ふ。

だから、道頓堀の女給を怪しからんと云ふ前に、女給の人数を制限すれば餘程エロエロ問題は緩和されるに違ひない。

第一百人も百五十人も女給を置くことを許すのが間違ひである。でなければ、女ををいて男を寄せつけるやうな商賣は一つ残らず叩きつぶした方がいふ。ねえ、さうではありませんか。

然らば道頓堀といふ所はどれもこれもエロエロ女給のカフェーばかりかといふとさうではない。

和洋とりどりの食堂がバラ撒いたやうに軒を並べて、凡ゆる階級を吸ひ込んでゐる。

辨天座の隣りには文學青年の寄りつくカフェー珊瑚、これは西山千代子女史の経営、高尚な喫茶店と云つた感じである。

新戎橋の南詰を入るとスポーツマン清川氏経営のキヨカワ、戎橋西入に新派俳優の梅島昇の二號か三號かの女がやつてゐるカフェープラムがある。

こゝでは旦那を連れ出した南地の藝妓たちが、芝居見物や欲しいものをネダつてベチャクチャと喋舌つてゐる姿が毎日のやうに見受けられる。



カフェー以外の食堂はこれ又夥しい。

小つほけな一せんめし屋の長行燈が成功して、堂々たるレストランを始めたのもあるし、古くから獨得の料理を自慢にした食堂もある。戎橋の魚すき丸萬と云へば、道頓堀を知つてゐる程の人は誰でも知つてゐるし、元治元年の創業だといふから威張つても仕方があるまい。もう一つ誰でも知つてゐるのが出雲屋のうなぎ、關西人に云はすとまむしである。この店は古くはないが安いので有名、口の悪いのが、餘りに安いので蛇だらうといふ。蛇ならもつと高いかも知れぬ。

近來めきめきと賣り出した店に柴藤があり、道頓堀の舊い老舗東吳に對抗して些か優勢の地位を占めてきたのは、場所がいゝのか、それとも料理がうまいのか、或ひはもつと別な理由があるのか、兎に角素晴らしい繁昌を示してゐる。

その他、カフェー大正亭、南海食堂、みどり、みやげ、かどや、浪花亭を始め大阪すし、東京すし天ぷら屋、喫茶店など一々列舉したつて、別に大した興味もあるまいから省略するが、大阪比物に來た程の人なら、宗右衛門町の菱富や、法善寺境内のみどりあたりで、あつさり拾圓位の晚餐をとつて

みるのも話しの種になつていゝだらう。

## 第五章 色町の灯

道頓堀を廻る色町の繁華は、これ又僕たちの見逃し得ない歡樂の巷でなければならぬ。

東京では藝妓ゲイジと云ひ、關西では藝子ゲイコといふ。それと同じやうに待合遊びまちあそび茶屋遊びちやあそびと云ひ、お酌おしやくを舞子まいこと呼ぶと云つた風に、それぞれ名稱が異つて來るのも面白い。

カフェーと女給の華々しい進出が、藝子とお茶屋に手痛い打撃を與へたことは大阪も東京と變りはないが、カフェーで飽き足りない人間は、またやつぱりもとの古巢ふるねに舞ひもどつて、お茶屋遊びちやあそびにうづを抜かしてくれるからありがたいもの。

「この頃の女給はもうまるで淫賣や、あんなもんつゝいたつてしようもないさかい、わいはもうカフェー遊びは止めや。」

ドラ息子がかう云つてお茶屋の女將の機嫌を取れば

「ほんまに女給はんなんて共同便所と同じだつせ。」  
と、不見轉の提灯を鼻高々と持つのである。

男といふものは格着なもの、女がいふことを聞き容れるまでは熱中するが、一旦聞き容れて了ふと興味も愛着もあつたものではない。エロエロ女給も、金で自由になることが徹底すれば、暫ては又彼女たちの飽かれる時代も来るであらう。

さうした時節が到来するやうに、そして、もつと景氣がよくなつて大小成金が蛆の如く湧いて呉れるやうに、全國の藝妓ガールは日夜お稻荷さまや聖天さまに参詣して、口の先だけでなく心の底から念じてゐるのだ。

大阪で南地と云へば、少しでも物心ついた男には、極樂淨土のやうに考へられてゐる日本有数の大花街。

夜の道頓堀に映る宗右衛門町のおの艶めかしい灯影は、表通りの灼爛眼を奪ふネオンサインの輝きとは違つて、何となく身も心も吸ひ取られて行くやうな懐しい情趣を深へてゐる。

島の内藝子と云へば、ダンゼンお高くとまつてゐる點に於て、新橋藝妓に匹敵する。

一夜に百金を投じなければ一緒になられない妓もあるし、百金でも首を横に振る妓もあるといふ。けれども世の中には、普通のサラリーマンの三千年ぶん退職手當を貰ふ會社の重役もあれば、一分間に十圓づゝの収入がある相場師だつてゐるのだ。

百圓バッチの鼻糞みたいな金は、一夜人命を預かる代價としては、その餘りにも安つほいのに驚く人間だつてゐないとは限らぬ。

女給にチップの五千圓もくれて、涼しい顔してゐた學生さへゐるのだから、あれこれとおつ魂消てゐる日には、人生バカバカしくて生きてはゐられまい。

横式が高くて宗右衛門町がいやだと仰言るなら、南地五花街といふて、九郎右衛門町もあれば、千日前の入口から東へかけて坂町のみづてん藝子もある。芝居裏も氣安く遊べるし、もつと氣品を重んずれば南へのびて難波新地がある。七百軒の待合に千五百の藝子が巢喰つてゐるのだから、懐ろ工合でどんな遊びも出来やうといふもの。

藝や唄はどうでもいゝからといふ野暮天には、これ又野暮天むきの送り込みがあるから、そこに如才はサラサラ御座らぬ。一本十五銭の花代を一時間十二本と見て一圓八十銭、二時間で三圓六十銭。席料その他で拾圓もあれば兎に角南地でお茶屋遊びが出来るのだ。安上りに圓滿解決をつけた人は芝居裏に入つて浪花でも東雲でも、その他眞砂、川駒、米屋などで一現の交渉をされるがいゝ。

それとも、金の使ひ場所に困つてゐる方があれば、一流藝子を招いて宗右衛門町の富田屋、大和屋、伊丹幸、大西屋、河合などいふ一流茶屋で、何を云はれても

「ウム、ウム」

と、大きく傾いて紀文大畫の向ふを張り、云ふがまゝに大盤振舞をして小切手帖でも預けつばなしにしてをけば、至誠たちまち天に通じて、神女でも天女でも御意の召すまゝにその効果は現はれて來やう。

昔から宗右衛門町には熱情家の技が多いといふ評判だし、ロマンチックで、清純で、数々の物語りにも涙ぐましいのが絶えないとのこと。人間男と生れて、一生に一度はしみじみ自分の果報を喜こん

でみるのも悪くはなからう。

たゞ島の内ではエロ中心で遊ぶよりも、氣分本位で遊ぶ人の方が歓迎され、顧客のいゝのを誇つてゐるのも宗右衛門の傳統的精神であらう。

有名な河合ダンスと云へば、たまに東京にまで進出して、東劇や帝劇のたりで公演するが、これも宗右衛門町の河合といふ待合が、摩登イズムに適合するために始めた仕事で、スターの駒菊さんになざわフランスまで踊りの稽古にやつたといふのだから、待合の爺にしては話せる方である。

又、見方によつては茶屋、衰微を物語つてゐるとも云へやう。

押しも押されぬ古くからの地盤があり乍ら、大和屋あたりでも「やまと倶楽部」など設けて、ツシアル・ダンスなど始めたところを見ると、矢張り時勢といふものには意志を曲けても、これに追従するのが恰愴なやり方であるのかも知れない。大和屋の小女養成所と云へば、恐らく日本には珍しい藝子の學校で、同所からは多くの一流藝子を生み出し、近く第十六期生が卒業するといふから、これも宗右衛門町の變り種の一つであらう。

かくして、モダニズムの凡ゆる瀾漫は、やがて宗右衛門町の傳統を破つて、一現の客でも自由出入せしめるやうな時期が来るかも知れない。銀行家の集合だとか、堂島あたりの實業家の招宴にお約束で出かける南地藝子は、この後果してカフェーのエロエロ女給とどんな對抗戦を見せてくれることやら、彼女たちの存在はあくまでも踏み止まらせてをいて、夜の花の彩どりを永久に美しく複雑なものにして欲しいものである。

わけても、一月十日の今宮戎神社の祭禮の夜は、南地の藝子に乗せた「實惠鷲」が見られるだけでも嬉しい。

派手ないでたちのたいこ持が、紅白縮緬の綱先を握つて

「ホウエカゴホイ、ホウエカゴホイ」

と曳いて行くさまは、土地の人々の好奇心をどれだけ咬り立てるか知れないではないか。

あしへ踊りと共に南地の二大名物として、かうした特種な風景は何人が見ても眼の毒にはならないのである。

南地以外にも大阪の花街は到る處にある。後がつかえてゐるから簡単な紹介のみに止めてをかう。

新町などは歴史的にも古いし、堂々たるお茶屋の構へも浪花随一と稱されてゐる。

昔から豪遊客が多く遊んだ土地で、未だにその氣風が残つてゐる。

變つたものと云へば美木屋のキャバレーなど有名で、モボやモガに紛した藝子が、ソシアルダンスやらレヴェューなどを演じて大いに新しい所を見せる。

帝劇で屢々愚作を上演して見せてくれた益田太郎冠者も新町の顧問格なら、西條八十も、岡本一平も新町行進曲の歌を作つた。

文人や美術家と機會あるごとに何等かの連絡を取らうとする心構へは、この役員の頭の新らしさを思はせるものがあつて愉快だ。

藝妓も粒が揃つてゐるし、ケチケチさへしなければ、思つたより簡単に轉ぶといふので、それしや仲間には評判がいゝ。

南地のあしへ踊りに對する浪花踊が四月に行はれ、一年中だ彼だと催し物をやつてゐるのも新町

の特色であらう。

次は北の新地、これは俗稱で實際は會根崎新地である。近松兼林子の戯曲はこの土地を題材にしたのが頗る多い。江戸の柳橋によく似てゐる。クラシカルな點も、客筋も、傳法肌と云つたやうな點も似通つてゐる。

藝の牙えといつたやうなものが重寶がられ、又、それを自慢にしてゐることなどいよいよ柳橋そつくりではないか。

二百年の歴史と、七百の藝妓と、二百に近い待合、而も藝妓が役者すきなことに於ては大阪一、それだけに藝ごとに熱心なのかといふと、なに役者とイチヤツクのが好きださうな。餘り自慢にもならぬが、磯ぶしや安來節だけしか唄へない酔拂ひと寝るよりはましかも知れぬ。

このガツチリした古典的な廓にも今や摩登イズムが寸隙を狙つて浸入しやうとしてゐる。北陽藝妓の標か踊りも近い、ち見られよう。

更に南へ轉じて新世界がある。

こゝは南地につぐ歡樂郷で、映画、一流芝居、動物園や通天閣や、すぐ近くに天王寺の公園、音楽堂もあれば公會堂もある。

ジャズ、カフェー、ブカブカドンドン、いや大變な賑はひである。

ごもく飯をシヨトウインドウに晒した飲食店、あいまいや等々。

これだけの繁華さだから、もちろんお茶屋のない筈がない。南陽藝妓と稱するのは即ち新世界の技のことである。

演舞場ばやりの大阪つ見じ、演舞場がなければ花街でないやうに心得てゐるので、目下着々進行中である。

南地や新町に負けるものかと、ダンスン賑起してゐるんな新しいところを見せてゐるのはなかく、侮り難い。

フワウンテンバスなどいふ新式な遊び場所があつて、早朝から湯はカンカンわいてゐるし、餘りも見れるし、飯も喰へるといふモダン浴場である。

さうかと思ふと、電気館といふ旅館兼料理屋では一切合切電気仕掛、藝妓も呼べるし、送り込みも叶ふといふ。寢室の扉から、ベットの動揺まで電気仕掛かなんて、さうさう際限なく望まれても、それはちと無理な御望みであらう。

この地盤は吉田磯吉さんみたいな大親分ばかりの縄張りだから、酔拂つてあんまり無茶なことをするといつどこで

「おや、わいの眼が片一方なくなつたぜ。」

など、ベツをかくやうなことになるかも知れぬ。つまらない胸自慢など禁物である。

無理云はいでも、南地や新地に負けんいふとるのやさかい、おとなしく綺麗な姐はんたちに抱いて寝て貰ふた方がよろしうおます。

シャンも多いし、藝も達者、それで文句や不服があるならぶん擲られても仕様おまへん。バラ棒な鏡くれい云々のやないよつてナ。分りまひたか。

藝妓本位の席はそれ位にして、娼妓本位の席を散策しやう。

松島遊廓と云へば、京の島原、江戸の吉原と並んで日本三大廓の一つだ。娼妓の数が四千といふから吉原に負けない。

松島移轉問題でだいぶん世間を騒がしたが、今はその噂さへ消えて了つた。

東京の廻しと違つてこゝは時間制限である。實際あの廻しといふ奴は不愉快だが、時間制だつて矢つ張りそこには抜道もある。

櫻筋が何と云つてもいちばんいゝ。丸い瓦斯燈の光りが葉櫻の枝を透して漏れるのも靡らしい氣分である。

「え、どうぞお上りやす。」

裾を掴んだり、肩先を抱きすくめるやうにする番頭の手を振り放すのがなか／＼骨だ。

「あんたはん、東京から来やはつたの。妾えも一べん東京へ行きたいし。」

娼妓の部屋で宵一徹を盡してゐると、どこからともなく江州音頭が聴えてくる。

夜更の十二時再び表に出る。

これが夏ならば、まだ浴衣がけの嫖客がゾロ／＼して、煙草を射落さうとする空氣銃店の前にも、燈籠の前のにも一ぱいの人。

博多節の尺八の音が流れ、酔つ拂ひの——テナモンヤナイカナイカ道頓堀よが弾けるやうに聴えてくる。

その他、どこの席の気分も同じである。

松島よりもデカタニツクな気分が濃厚なのは飛田の遊廓である。

色彩も近代的である。玉突場や、立派な風呂や、ダブルベットや、支那式の寢臺をつけた店もある。洋装した遊女もある。

真夜中の二時三時頃出かけて行つても、飛田へ行けば決して途方に呉れない。

十二時一時は宵の口である。どんなにお腹が空いても、二時三時に何だつて食へる。ほかの真似の出来ないところ、二次會、三次會には最良の歡樂郷であらう。

遊女だつて二千人からある。花代だつて一本十五錢で一時間十本だから、任切をかけ合つて遊ばな

くても高は知れてゐる。

新興地帯として長足の進歩めざましいものがあるから、更に更に發展することであらう。機轉を利かした連中は、早くもこの附近に怪しい構への家を建てはじめた。

その費目なまには只を驚くの外はない。

### 第六章 上方名物やとな

上方特有の職業婦人にや、なといふものがある。藝妓の役目と娼妓の役目と兼ねてゐるが、私娼ではない。

ちやんと公認された存在である。やとな俱樂部とか、組合といふものがあつて、客の求めさへあれば飲食店だらうと、ソバ屋だらうと、出先の上下はかれこけ云はぬ。

歌澤や常盤津など註文したつて、それだ註文する方が野暮であるが、俗歌や端歌の一つ二つ位は、ボロンボロンと三味の音に合はして唄つてもくれやう。

その代り花代もすつと安い。

仲居上りもあれば、お茶引藝妓のなり下りもある。大きな宴会などがあつて、藝妓が出揃つて間に合はぬ時は、やとなでも呼んで散財しやうといふことはあり勝なことだ。

なかには安いのと轉び易いのが嬉しくて、やとなでなければ承知出来ない安月給取もある。

拾年も仲居稼ぎをして小金も相當にあるが、遊んでゐても——といふので働いてゐる女も多い。従つて、やとなを狙つてゐる男がこれ又なか／＼妙い數ではないのである。

のろ間男や、仕事嫌ひや、バクチの好きな兄イヤ、やもめ暮しの魚屋の旦那と云つた風にネ。

やとなと云へばどうしても總體に氣品が落ちる。お尻が大きくて手足も水ぶくれみたいなのが多い。若いのが稀で殆んど爛熟期の年増である。

その油ぎつた體がこたえられないといふので、背のうちには藝妓を呼んで一騒ぎ演じ、夜更けになるとやとな姐さんと何處かへ雲隠れする變り者もある。

盛り場にはたいてい何處にでもゐるから、關西以外の人たちは一度これに當つてみるのも何かの経

験にならう。

二流三流の料理屋でも結構だから、女中に命じさへすればすぐに呼んでくれる筈。別にうるさい規則があるわけでもなく、八釜しい習慣もないからやとな買ひは簡便である。

「え、彼女と雲隠れする方法？」

そんな野暮な御質問は……女中にさへ頼めば、一にも金、二にも金の色町のならひ、そこはそれ——

ねえ。

それとも、御土産いたゞくのが恐いやうな方は、最初から素情の知らない女など御對手にしてはいけない。

週に一回づゝ検査をやる娼妓からさへ、われわれは屢々結構なおみやけを頂戴することがあるのだから。

このやとなの出先は範圍が廣くて、宴会のお手傳ひにも雇ふことが出来るし、なかなか重寶な代物である。



藝もたいして出来ないし、さればと云つて娼妓までなり下るのも気がひけるし、賣笑婦になつて秘密探きは尙ほいやだといふ、凡ゆる意味に於ての日和見の傾向をもつのがやとなの特徴であらう。けれども藝妓や娼妓よりすつとお金がたまる商賣ださうだから、われと思はん方々はこぞつて結婚の豫約申込をすべきである。

いゝチャンスといふ對手さへあれば、いつでも足を洗はうとしてゐるお姐さんたちが多いのだから、思つたよりも案外はかばかしく相談がまとまるかも知れぬ。

さて、以上で概略ではあるが繁華な夜の街の空気を吸つた。こんどはどんな遊びがいゝだらう。少し變つた方面へ進出しやう。藝妓や娼妓ばかりでも油っこくてうんざりするからネ。

### 第七章 賣家行遊記

大阪の空はいつ見ても暗い。なにしろあの無数の煙突から吐き出される煤煙が、どんよりと重くのしかつてゐるのだから耐らないやネ。ものゝ一週間もゐると、何だか鼻の穴まで黒くなつて来るやうな気がする。

よろしい。今日は郊外へ出て清淨な空気を胸一ぱい吸つて来よう。

それに、甚だ嬉しいことには、カフェー美人座のA子が僕と同伴する約束である。

ヤケ糞の悪いお方もあらうが、そんなことは僕は知らん。癪に障れば交番へなりと、郵便局へなりとお訴へになるがよろしい。

僕と彼女は今日一日だけ神聖なラブとかいふ奴を約束したのである。

お金が天下の廻りものなら、女だつて天下の廻り者である。ぐすく云はないで順番をお待ちになつたがお爲であらう。但し、待ちボケを喰はされたからとて、僕ん所へ捻ぢこまれても馬の耳に風である。

春の郊外散歩、悪くないネ。

午前十時までに梅田驛の二等待合室で待合はす筈にも拘はらず、九時すぎまで朝寝坊をした僕はズボンのボタンを二つ、嵌め外して飛び出して了つた。

圓タクを拾つてサツと飛び乗つたまではよかつたが、ポケットに手を突込むと肝じんの紙入を忘れてゐる。腹に障つたのでボカンと自分の頭を一つ擲つてみたが、擲つてみたところで忘れたものは忘れたのである。

そこで、着物の裾に火が移つたやうなアワテ方をして、紙入を取りに後戻りをし、再び自動車に乗つた時は十時までには後僅か五分。

こんな時の自動車のノロさ加減つたらないネ。こんなものが文明の利器かと思ふと全くブチ壊して丁ひたくなる。

おまけに何といふ邪魔くさい十字街であらう。ゴーだとかストップだとか。人さへ嫌き殺さなければどうでもよさそうなものだが、さればと云つてハロルド・ロイドが自動車を運轉するやうなわけにも行かない。

驛前でビタリと止まると、時計は既に十時十分すぎである。

「A子はどんなに怒つてゐるだらう。もしブンブン怒つて歸つてゐたらどうしやう。苦辛に苦辛を

重ねて獲得した一日のラブがふいになる。もしそんなことにでもなると、日本が満洲を支那に返還するのと同じやうな犠牲である。」

てな工合に、あれこれと考へ乍ら待合室に飛び込んだ。

前後左右をグルグルと急速度に二三回ほど見廻したが彼女の姿は見えない。

實に、奈落の底に墜ちるやうな失望である。仕方がないからボカンとして煙草を燻らしてみる。右にも左にもボカンとしてゐる奴が多い。

空想は八方に亂れて散る。

「彼女の時計が間違つてゐたかナ。」

「たしかに十時かつきりと云つた筈だ。」

「腹でも痛み出したのではないか。」

「まさか約束を無視したわけではないか。」

「それともベタンにかゝつたかナ。」

こんなことを十べん位つゝ繰返してゐると、漸く三分程時間がすぎた。同じ三分間でもダンスの三分間とはまるでその長さが違ふやうな気がする。耐らなくなつて驛の入口まで出てみた。

来た来た。まさしく彼女である。紫縞の小紋錦紗に薄バラ色の帯、春の粉装いんまは見るからにして軽く腰のふくらんだのがとてもうれしか。何と思つてか丸髻に結つた髪もいやにエロチックで、晩には何處かで泊るのを覺悟して来たやうにも見える。

すんでのことに前につんのめらうとしたが

「いや待て待て、甘く見られちやいかん。」

と、僕は彼女の方で気がつかない間にサツと身を隠して、行きたくもない便所の方へ消えたのである。

引返してみると、彼女、僕と同じやうにグルグルと二三度見廻したらしい。さぞ、いら／＼したことであらう。ザマア見やあがれと云つた風な氣持で悠然と這入つて行く。

断はつてをくが、こんな場合に決して嬉しさうな顔をしたり、あはて、相手に抱きつくやうなヘマな眞似は僕は決してやらない。

「アラまあ、どないしやはつたの。妾えもう來やはらないのかと思つてまひたわ。」

といふまゝ黙つてゐるのである。その時に至つてはじめて、

「やいぶんお待ちになりましたか。いや失敬！」

とちよつと顎をしやくるやうにしてふんぞり返るのである。

かういふ所が若いニキビ面の青年には眞似の出来ないところですね。戀のしぐさ四十八手の二つと心得てをいてよからう。

かくして有金全部、紙入ぐるみを女に渡してすふのである。然し、實際は三分の二ほどで別たすやうにしてしまつてをくことを忘れてはいけない。

「これみんな使ふてもかめえしまへんか。」

など云はれたら、それこそ飛んでもない災難だし、あれこれとネダられでもしやうものなら、一

日の享樂代にしては頗る割が悪い。

兎に角僕たちは寶塚ゆき電車の方へ足を運んだ。すると僕たちは、いや僕自身は甚だ不愉快な出来事によつたのである。

どこの馬の骨だか牛の骨だか知れないが、いやしくも吾輩のいとしきマダムの如く装つてゐるA子に對して

「おいAちゃん、どこえいくのや。バカにしやりにしやりにしてゐるやないか。フン、うまくやつてけるな。」

と、横合から飛び出して不埒千萬の暴言を吐いた奴がある。

體裁の悪いことまさに百パーセントだ。これが昔なら、一刀兩断のもとに運切にしてくれるところだが、僕は只慨然として生唾を呑んだにすぎない。なぜなれば、僕の腕力を以つてしては到底彼を擲り飛ばすことなど出来さうもなかつたから。

「あのうちよつと……!」

とA子は只それだけ答へて恥しさに俯向いた。

彼女の表情によれば、彼の不埒なる男といふのは、僕よりずっと順香の早い果報者であつたに違ひない。

幸ひその男は僕たちと反對の方向に行つたからいゝやうなものゝ、僕はたつた一日の神聖なラブがいかにつまらないもので、惨めであるかをまざまざと體驗した。

「あの男はあれ何でスウ。」

電車に乗つて僕はそつと訊ねてみた。

「あの人わてえのうちよつと知つとる方……!」

ちよつとではな て、彼女體のあらゆる部分を知り盡してゐる男であつたらう。」

だが僕はそれきり黙つてゐた。石の如くに黙つてゐた。電車は満員壽司詰めである。

圖々しい奴が僕たちの僅かな隙を狙つて腰をかけやうとしたから、僕はいち早く彼女にピタリと喰附いて「俺のものだぞ」といふやうな顔を見せてやつた。それでも、彼女の前に立ちはだがつたへナ

チヨコ野郎は、わざと膝頭をA子の脚に擦りつけてゐる。圖太い奴だ。春とは雖、陽光うららかに丈けて早や初夏に近い季節である。

衣服を通して骨々と迫る女の甘い体温は、惱ましい香りと共に僕の額に汗ばます。

坦々たる平原には胡蝶が群れ飛び、遙かなる森かけには綺麗なバラソルが散見する。

武庫の清流のさ、やかなる水音、浮き立つやうな樂の音がいつくからとなく流れくると思ふ間もあらず、僕、彼女は遂に寶塚の街に着いたのである。

大都市郊外の歡樂郷として、寶塚のやうに理想的な場所は全國を通じて稀である。

周圍は山紫水明の美を誇り、街の中央には寶塚温泉を圍む藝術の殿堂、而も、まさに成熟期に入らんとする數百の美少女が、その優艶無比なる純白の皮膚を五色、照明に晒して亂舞するさまは、さながら地上の樂園である。寶塚の少女歌劇——この美しい乙姫たちは實に幾千幾萬の青年の血を沸騰せしめつゝあるのでは、いか。單に青年のみではない。今日では幾多のモダン・デーサンまでがツカサのファンとして寶塚通ひをやつてゐるか知れない。一夜づくりのエロエロ・レヅユウとちがつて、こゝ

の乙姫たちは禁斷の木の實とされざる。

摘みとることの出来ない花。

ファンのくやしがることひと通りではない。手紙でも駄目、プレゼントでも駄目、ハテ如何したらよからうかと、死ぬほど氣を揉んでる若い男がどれ位あるだらう。

あれで、内部にはいつもいろんなことがあると聽いてゐるが、最も美しき藝術の殿堂の面目のため、あまり立ち入つたセンサクをするのは遠慮しやう。

見せるための藝術である。眺めるだけの花である。寶塚の小女歌劇が女王、如く君臨してゐるのはそのためである。

僕とA子は先づ汗を流さねばならなかつた。獨身ものは千人風呂へ、夫婦づれは家族風呂へ。もちろん僕たちは家族風呂へ入つた。

風呂の内部のこまごましい説明などしなくてもよからう。夫婦ならざる夫婦らしい男女が、こゝに毎一日に幾組もなぐこの家族風呂に入るのである。

諸君のうちには既に屢々この結構なる家族風呂の恩典に浴された方もあらう。

うち側からピチンと錠を下して、濼々たる湯煙の中に浮ぶ女の姿、いかなる名工の繪畫彫刻を以てしてもこれ程の感激、與へられまい。頭は氷の如く冴えて、前人未踏の原野をわたる心地である。されど高潮せる胸の鼓動はこれを如何ともし難い。

「背中を流しまほうか。」

突如、湯煙の幕を破つてA子の潤みのある聲が僕の耳朵を貫く。

河中に舟を浮べて酒杯をくむ——なんて境地とはまるで比較にならない。

電車に乗る前の不快極まる印象は、今や全く胸底から去つて、蒼空に一點の曇りもなき秋の天空を見るやうである。

敢て痴人ならずともうつとりとせざるを得まい。ジャブ／＼と放ねる湯水の音、肩に觸るゝかほそき指、しかもそれは眼前に描く一片の幻ではなくて、惻々と身に迫る實感である。僕も亦熱誠と喜びとを單めて彼女の首筋を洗ひ清めてやつた。

嘗つて谷崎潤一郎の痴人の愛にこれと同じ場面があつたのを思ひ出す。

それから夢の如き世界を辿つて僕たちは外に出た。

A子は只俯向いて笑つてゐた。僕も亦笑つた。生温い風が疲れた頬をなぶるやうにして過ぎ去つてゆく。A子は頸筋に縋れかゝる髪の毛が氣になると見えて

「おかしくない？」と僕に訊いた。

「ううん」と僕は答えた。

オペラを見やうとする群集にまちつて、僕たちは劇場の隅つ子に陣取つた。

戀人を連れて觀劇する場合は、大きな顔をして前の方に反り返るのは馬鹿である。馬鹿と云つて悪ければ、ちと足りない人間のやることである。

觀劇に隔つこの席を選ぶ人と同伴したら、男はその女を、女はその男を充分信頼して差支えない。なぜなれば、そこまで氣のつく人は、對手を愛撫するわざにもなかく／＼ぬかりがないからである。が、歌劇は思つたよりもつまらなかつた。

尤も思つたよりつまらないのがナンセンスだから仕方がない。

暫て、屋外に出て武庫川の岸傳ひに人のゐない上流を漫步する。

磯に腰を下してロミオとジュリエットのやうに戯れる。

「今晚歸らなければいけないかい？」

「かめえへんわ。」

「ぢやあ寶塚ホテルへでも泊らうか。」

女は笑つて軽く頷ぐ。

要求が餘りに簡単に受け容れられると些さか呆氣ないが、突放なされたよりはむしろと思つて諦める。

土曜から月曜日へかけての寶塚ホテルはこゝ又素晴らしい繁昌である。

老紳士とマドモアゼル、スポーツマンとモダンガール、マダムと美青年と云つた連中がネ——それも選來の客がといふと、あながちさうときまづでない。いや、それどころか九〇パーセントは一日

に何回でも往復の出来る京阪神のお歴々である。

これで寶塚行遊記は終るが、獨りで遊びに行つた方が或ひはもつと面白く遊べるかも知れない。寶塚藝妓を招いで、寶雲閣あたりで豪遊するのも気分が變つてるだけ愉快であらう。

### 第八章 大阪私娼記

世の中が不景氣になる程いかもの喰ひが増えてくる。皮肉な現象である。

不景氣と淫賣、これは仲いよ夫婦である。切るに切られぬ縁なのだから仕方がない。

道頓堀をはじめ、あちこちの盛り場に客引の増えたことはどうです。

敏捷活潑なる彼等の活動たるや、實に左翼運動の細胞分子のやうではありませんか。

左翼と右翼の尖鋭化！ガイダンスすべき世の中ですナ。政治家だけの世の中になつたら、どんなに賄らかなスガスガしい感じがするであらう。エロが嫌ひ、女が嫌い。堅苦しい論文、それも、然り而して子の曰く——テナ文章がお好きで、ラブ・レターなど見るとへトが出さうだ、仰言な。

僕なんか何の因果か知れぬが、いつもお金は腐る程あるし、いたる所で女にはもてるし、いや實に世の中がうるさくて叶はん。——と、まア、こんなことでも云つて自から慰めるより外に方法は無い。それにしても、人間に性慾なんてものを授けた創造主の神さまは、實に憎みても餘りある奴である。飛んでもない厄介ものを人間どもになすりつけて、あれだと云はせてみたり、イットだと云はせてみたり、實に八つ裂きにしても尙ほ飽きたりない不埒ものだ。

ところで、話しは又もとへ戻る。

道頓堀のガイド(客引)には諸君のうちでも屢々出合はされた方があるであらう。

「旦那、どないだす。面白い所へ御案内しまほうか。」

と、恐る恐る近寄つて来る眼のギョロリとした男。

「おもしろいとてなんや。」

「へい、綺麗な姐はんのゐるといふ。」

「綺麗な姐はん？それあえな。」

こんな會話が平氣で道頓堀の真中で取り交されるのだから、世の中は面白い……いや、歎かほしうなつた。

「女優もゐます。踊り子もゐます。デパートの賣子かて、カフェーの女給かて何でもゐます。若いのかて年増かて、それあお客はんのすきすきだすさかい、旦那のえゝのを選つとくんははれ。」

どうです諸君、かうした女が×圓以下の金で自由になるのだと客引の男がいふのである。未亡人でもお妾はんでも、人妻だらうが若い娘だらうが、まるで市が立つやうなことを云つてけしかける。

何といふ近代人のだらしなさであらう。天の神よ照覽あれ、創造の神よ恥ぢるがいゝだ。嘘だと思召すなら論より證據、ナルベクにつべりした顔附と金のありさうなスタイルで歩いて見給へ。そして十圓オーライ、十五圓でもオーライと答へて、彼のガイドと一緒に圓タタに飛びのると、諸君は龜の甲に乗つた浦島太郎のやうないゝ氣持になつて、闇の川に吸はれてゆくであらう。

ガタリと圓タタの扉があげば、そこは大阪の南端萩の茶屋が、萩の茶屋でなければ天下茶屋、さもなくば岸の里の近邊である。



然し、そこは必ずしも龍宮の門ではない。龍宮に達する迄は、一つ二つの路次をクルクル歩かねばならぬ。

これは、龍宮の場所を誰かに悟られないための用心である。

又、時には、いきなり芝垣を廻らした高壯なる邸宅の門前に、ビダリと自動車が続つけにされる場合があるかも知れぬ。それは、よもやこもが美艷のまします龍宮ではあるまいと思はしめるためのトリックである。

更にある場合は、小さなしもたや作りの家で少刻を待たされ、脂肪ぶとりの立派なマダムに誘はれて他の家に導かれることがないとも限らぬ。

これは何者かに襲撃されても、平然とすまして押入でもどこでも開けて見せるための用意である。かくして軟派にも権左的な非合法運動があり、その巧妙な藝術が並々ならぬものであることを先づ

諸君は知るであらう。

流石に高深階級だけあつて、こゝに集まる女性には垢抜がしてゐる。どうせ化けものではあらうが、

令嬢らしいのや、女優らしいのや、モガらしいのが自由に撰擇出来る。と云つて張店みたいなわけにはゆかない。

も、又、ほんとうに諸君の氣に入つた女があれば、單に一々妻としてのみならず、諸君の第二號にして賣ふもよからう。

然し獨占するよりも、共、妾の方が流行する。今日サラリーマンの間では旺んに推賞されてゐる。甲乙丙の三人位で、一人三十個位づゝ出して第二號を圍つのである。一の日と十の日が甲、二の日と八の日が乙と云つた風にネ。

子供でも出来た場合が困るであらうが、兎に角近代の女性はおくの如き性生活の合理化をやつてゐる。

かゝる悪風は風教の害大なるものありと認め、取締り當局では血眼になつてゐるが、なかなか撲滅出来ないらしい。

「おまへ日活の誰々と寝たことあらへんやろ。あかん奴やす。」

こんなデマが旺んに飛ぶのも、かうした悪の巷から出る流言蜚語にすぎないが、なかには女優のなれのはてなども交つてゐて、そんな女が出鱈目なことを言ひふらすのかも知れない。

「ズブの素人でござんす。」

と云ふ東京の密淫より、上玉の揃つてゐることだけは流石大阪である。

いづれにしても大阪の南はもの凄いい。萩の茶屋、出入する女に、若い頃なうての不良N子といふ女がゐる。

彼の情夫Kといふ男はチホ常習犯で長い牢獄生活をする事になつたが、N子は妊娠してゐたばかりに彼と別れることが出来なかつた。産み落した子供のために餘儀ない倫落の淵に沈んだ生活をしてゐるが、同じ罪を犯すにしても人様のものに手を觸れるよりは……と、すつかり神妙になつてゐるのがいちぢらしい。

女學校にも三年まで通ひ、生家も相當の暮しをしてゐるのに、繼母なるが故に家にも歸れず、母と嬰兒を抱き締めては悲しい縁ぎをつけてゐる。

嘗つては短刀を懐にした氣の荒々しい不良を顎先で驅使したN子、白刃の下でもニッコリと凄い笑を漏らしてタン阿切つた彼女は、いまドストエフスキイの罪と罰に出て来るソーニヤのやうに體を汚しつゝ、益々魂をみがいて夫の出で来た時の準備や、子供の養育につとめてゐる。

「どうせ汚れた體なのよ。でも夫に妾しの生活のすべてをチャンと知つてゐるのです。知つてゐて許すものゝ苦しみに對して、妾はきつとそれだけの償ひをしなければなりません。」

珍らしい東京辯で彼女の告白をきいたとき、僕の友人は遂に彼女と同表する氣にならなかつたといふ。奴にしては話しが少ししほらしすぎるので、

「どうしてそんなことを彼女が告白したのだ。」と訊ねると

「寝物語りさ」と答へるのである。

「なアんだ。寝物語りなら變ぢやないか。」

「うんにや、遠慮したのや。」と云ふ。

「君も案外蒸久地なしたネ」

と笑つてやると、彼はニヤリと笑つて

「ところが女の方でな、それはそれ、これはこれ、そんなことでクサクサするのは男らしくないわよー」といふさかい遠慮するのをやめたのや。」

人を喰つた奴である。然し、その實、僕も彼の紹介で彼女を知つたのであるが、細そりしたスマー  
トな顔附のいゝ女である。濃い眉、伶俐さうな眼、右眼の下に小さなホクロのある女ですから、萩の  
茶屋のあのいちばん高壯な家でさうした女をみついたら、それがN子だと思つてやつて下さい。

それから天下茶屋の女張り同じやうな家、尤もこゝは左程大きな家ではありません。由緒ある人の  
未亡人ですが、いろんな悪名を流した女で、蒼い眼玉の子を産んだと云へばジャアナリスト仲間では  
たいていの人を知つてゐる筈です。以前は天王寺公園の近くにゐたが、夫の遺産も一人娘と一緒に目  
茶苦茶に使ひはたして、揚句の果に變な商賣を始めたのである。娘の名はたしか美津子だつたと思ふ  
が、これが又なか／＼の莫蓮者で、英語は話せるし、ダンスは出来るし、そこちちモガの友だちが  
多いところから、親子共同でいろんな女を誘つて來ては内密騒ぎをやらせてゐた。

暫らく御無沙汰してゐるので、或ひは又移轉してゐるかも知れないが、此家へはもと道頓堀のユニ  
オンでダンサーをしてゐたといふ女も來てゐた。

たつた一度の外泊で悪性の淋ちやんを買つてから、その女はすっかりヤクザになつた。自分の罪は  
細にあけて、凡ゆる男を呪つてやる。うつされた病氣を分けてやる。——と口辭のやうに云ふ始末の  
悪い女、異性に復讐するために賣春婦になり下つた。

私娼のひねくれたのにはさう云つた種顏の女が多い。野暮一點張りの遊びは危険である。さうかと  
思ふと、こちらの要求に對して、最初の約束金以外に一つ一つ値段をせり上げて行く圖々しい女もあ  
る。

客の方では高い金を拂つても、彼女たちの實際の収入は、極めて少額になるからであらう。ガイド  
の手數料、媒介所の席料と手數料、そんなものを一つ一つ削られたのでは、實際女の方でもやり切れ  
まい。

けれども、客引の方に云はせれば、客引がいちばん割が悪いのである。一人お客を掴まへると三圓

から四圓の手数料にありつけるとはいふもの、最も危険な藝當は客引がやらなければならぬ。へたに私服の警官にでも口説きかけやうものなら、すぐに引捕へられてブダ箱に叩きこまれるのだし、おまけに科料でも喰つた日には全く眼もあてられない。

「こんな商賣せにやならんのも、圓タクのお蔭でわいらの商賣があがつたりになつたからだす。」と、辻車夫のガイドがこぼすのである。見つかる迄の壽命だから、その氣苦勞もたいていではあるまい。

大阪全市のうちでは、まだ他でもするぶんこの種の高等淫賣はゐると思ふが、前記の三ヶ所では私娼の数が約二百人、秘密の家が約三十軒位のものであらう。

ガイドは必ずしも辻車夫に限つてゐない。いろんな破廉恥漢も交つてゐる。ひどい奴になると、最初はお客づらをして行つて、二度目には脅喝に出かけて割前を取るか、無料で遊んで来るかする。こんな輩にかつたら災難で、つけこまれるだけつけこまれるのである。組織だつた商賣でないだけに表沙汰にも出來ず、地廻りもをけない程弱い商賣だ。

お客はすべて中年の男又は老人である。老人連は特種メンバーといふ奴で、ガイドの引張つて來るのは多く中年の紳士だ。

成る家では特別の人たちに限つて、幾組もの男女を一緒に入浴せしめたり、新客の情景を視察させるやうな方法も講じられてあるといふ。噂だから當にはならないが、他では眞似の出來ないやうな遊びがあるとのことである。

それに反して、同じ私娼でも貧民街の私娼となると、最早僕たちの眼には歌樂郷ではなくなる。恐るべき人肉の市場であり、忌むべき犯罪の養成所である。

わけても今宮の貧民街（大阪人には釜ヶ崎の淫賣と呼ばれてゐるが）などその最も代表的なものである。

住吉街道も今はすっかり改装されて、アスファルトの立派な道路になつたが、そこを一步入ると八田町、東田町、東入舟町、西入舟町といふゴミ捨場のやうな街が展開する。

最下層のルンペン・プロレタリアが居住する地帯で、屑拾ひ、乞食、下駄の齒入等々が溝の中のボウフ

リみたいに鼻喰つてゐる。

ならず者や、のらくら者ばかりがあると見えて、自分が見張りの役目や、客引きをやるといふ情けない輩である。

亭主が、ほかの淫賣を買つたといふので、掴み合ひの夫婦喧嘩をすることなども毎日眼になれて珍らしくはない。

甚だしいのになると、僅かの端た金で惜し気もなく大切な身體をぶちまけて了ふ。日收一圓を最高に、三十錢四十錢、なかには二日も三日も無収入の男がある。

家族が死んでも葬儀を営むことさへ出来ないで、薙にくるんだまゝ投げ出して置くといふありさまだから、その惨状は見るに耐えない。仕事にあぶれた浮浪者たちが、旺んに婦女誘拐をするのもそのためである。

田舎から出て来た女などが、かうした悪漢に捕はれるともう再び明るみへは出られない。拾圓か二十圓、甚だしいのは五六圓でも賣り飛ばして了ふ。

といふ。

バクチも、姦通も、賣淫も、スリも、その他ありと凡ゆる罪惡がこの街ではほんの日常茶飯事なのである。

一錢か二錢づゝの賭博で四五十錢も負けると、それこそ彼等にとつては大負債だ。そこで債權者に女を貸與するといふやうなことが寧ろ道德のやうにさへ考へられてゐる。

人間の無恥もこゝまで達すれば、既に動物と大差はない。

木賃宿から大賃宿へと、着のみ着のまゝで貞操の押賣をするのがゐるかと思ふと、蒼顔倭軀の少年が、家計を助けるために男娼となる。夜分になると實際これらの男娼は街頭に立つて道行く人を誘惑するのだ。

この憔悴たる姿は警察でも全く叩きつぶすことは出来ないのである。

もし彼等を檢査して留置場に止めれば、それこそ彼等に我も我もと殺到して來るであらう。なるがまゝの世界である。救濟の道もなければ、停止させる方法もない。

これと類似した場所はほかにもある。俗に天六の淫賣と稱されてゐるもので、北區天神筋六丁目の市電停留所附近である。

又、新世界の歡樂郷と接した東關谷町の南方一帶にわたる賤娼街、その何れもが×圓以下の金銭で腐肉を提供してゐる。

これらの私娼と、玉造などの私娼と比較すれば、そこにはいろく面白い對象もあるが、僕たちは餘り不潔な歡樂郷は好まないからこゝらで切りあけてをかう。

それに大阪貧民街の私娼窟に就ては、雜誌犯罪科學に詳細に發表された。

### 第三編 横濱歡樂郷案内

第三編 海外遊樂案内

「本邦を遊ぶには東京で遊ぶのはバカらしいよ。」  
「本邦」といふ言葉を聞いて、  
ヘマの遊び場

「同じ金を使つて遊ぶのなら東京で遊ぶのはバカらしいよ。」

悪食仲間の槍本勘吉が僕に向つてかう吐いた。奴にしては洒落たことを云ふと思つたので、

「どこだい？金を使つてバカらしくないところは？」

「ハマだよ！」と彼が答へた。

僕が横濱へ遊びに行き出したのはそれからである。

「一口、横濱と云つても、横濱だつてあれで相當広い。海岸ばたで風に吹かれたつて仕様がなし、伊勢佐木町の夜店をぶらついたつて始まらない。」

「ハマで遊ぶと云へば、東京の人間には本牧で遊ぶといふことに意味が通ずる。」

「横濱の本牧とはどんな所か？」

「いまだこんな野暮な質問をする人間も恐らくるまいが、本牧と云へば日本が有する唯一の國際的

エロエロ街なのである。

どんなに大きな面をして銀座のベージュメントを歩いて、本牧を知らないやうな奴はモボの資格を有しないと云はれる程、こと程左様に現在では東京人と本牧とは切つても切れぬ腐れ縁だ。

と云つて、東京の人間でなければ本牧で遊べないと云ふわけではない。

どこの馬の骨だらうと牛の骨だらうと、お金さへもつてゐれば誰でも遊ぶことが出来る。たゞ、頭のコチコチにかたまつた道學者、貯金の通帳をいつも神棚に祀つて置くやうなケチンボ、モガの嫌ひなパンカラ男、そんな連中は決して本牧あたりをウロウロしてはいけない。ウロウロするだけで病氣になつたり、精神に異状を來すかも知れない。

東京方面から遊びに行かうと思ふ人は、先づ省電機本町驛で下車する。ここから歩いて

下車したらずぐに驛前のタクシーに乗つて

「本牧」と落ち着き拂つて命ずればよい。

「本牧まで五十銭で行かないか？」

など、云つても、横濱のタクシーは負けて呉れない。町が狭いから五十銭均一ではマリ切れぬと断はられるから、値切つたところがムダ口をきくだけ損である。

もし、この場合、二十圓か三十圓しか持つてゐない場合は、大きな御面相で

「ホンモク」などとふんどり返つてはいけない。本牧の第一キヨ・ホテルとか、カノ・ホテルなどでは、二三十圓パツチの金ではゆつくり落着いて遊べないし、どんな赤恥を掻かないとも限らぬ。

なれない人間はそのためによく失敗するのだ。なにしろビール一本のんでも、ウキスキ一杯のんでも一圓以上ふんだくられ、おまけにツバを喰付いた女にジャンジャン飲まれるのだから、少うしボンヤリしてゐるやうなものなら二十圓や三十圓はまた、く間になくなつて了ふ。

ビール一本のませても、ウキスキ一杯のませても、本牧ガールの方では歩合をもらつてゐるのだから叶はない。こちらで高い洋酒を御馳走して、その上歩合までシボられてゐるのでは、叩いてお金が出ない限りトテもたまつたものではないのである。

だから、いつそのことポケット用のウキスキを二三本もつて行つて遊ぶに限る。



もしその場合

「あらガツチリしてゐるわねえ！」

とか何とか女の方で言つたら、

「その代りこれをやるよ！」

と、歩合の代りにチップをよけい奮發すれば、

「あら、あんた頼母しいわねえ！」

と、三角のやうな腫が急に廻轉して糸のやうな細い眼差に發展轉化するであらう。

然しこのウイソクに吊りこまれて、

「サチはこいつ僕に氣があるな。」など、早合點してはいけない。

凡ゆる男に對して、彼女たちの惚れないこと實に大磐石の如き概がある。

本牧ガールは決して對手に惚れないことを唯一の生活信條としてゐるのだ。

その點、他のもろもろの尾のない狐と同じである。



某氏とフツナ嬢(本牧に) (一)

最初遊びに行つてバカにもてたから、二回目はそれ以上だらう——など、飛んでもない己惚心を起さないこと、起したが最後ムネ糞が悪くなつて腹が立つであらう。

本牧の女は萬人の共有である。獨占できない闇の花である。而も、それたゞ日本男子だけを相手にするしほらしい女性ではなくて、世界各国の好色漢を手玉に取らねばならぬ妖女である。

たとへて手が鈴木傳明だらうと、岡田時彦だらうと、それとも華族の坊ちやまや實業家のドラ息子だらうと、彼女たちにとつては、誰も彼も十把一からけにへへののもへじに他ならない。

### 本牧ガール

一般には本牧ガールで通つてゐるが、これを厳密に云へば、大丸谷ガール、十二天ガール、小湊ガール、本牧ガールと四つに區別しなければならぬ。

つまり四つの場所を總稱して世間では本牧、本牧と呼んでゐる。

けれども、實際に各々レッキとした地名があり、距離も二三丁乃至七八丁づゝ離れてゐるのだ。

そのうちでも本牧は最も海に近く、前にも云つた様に第一キヨとカムの兩ホテルは第一流、往來から立關まで約七八間もある堂々たる構へだ。

第一キヨ・ホテルのお濱さんと云へば、口も達者、腕も達者、殊に千軍萬馬の強物でも、まるで子供が大人にからかはれるやうなありさまだから、我も我もと押かけてゆく。

本牧の女王としてお濱さんの名に餘りに有名である。彼女のことは今日までどれだけ書きつくされたか知らないが、彼女の名前は本牧のチャブ屋が存続する限り、永久にいろんな語り草として残るであらう。

どんなに眉目秀麗な好男子でも、彼女から惚れられたと云ふ話をきかない。

それでゐて、どんな不景氣な晩でもお茶引をしたと云ふ話をきかない。

もつて彼女のラッ腕を知ることが出来るではないか。

一度彼女を呼んだ客は、彼女のサービスがいつまでも頭の中に焼きつけられたやうになると云ふ。もつて彼女のバツシヨネートなサービスが想像できやう。

然し、それでゐて彼女を對手にした男はみな物足りない思ひで歸つて來ると云ふ。

なんと辻褄の合はない話ではないか。

お濱さんの値うちがそこにあるのだ。

どんな男にも氣を許さない鋼鐵の心——その氣概一つが彼女をあれだけ有名にし、彼女の容色を一向に衰へさせない原因である。

然し、傳ふる處によれば、その鋼鐵の壁も一度か二度名もなき年少若輩の士に破れたいふ。

それでゐて、お濱さんは彼を愛する代りに、彼に品物を與へたといふから、肉體上には征服されても、依然として鋼鐵の心に失はないといふのである。

近代の女傑ではないか。

一夜に數百 金を得て、一夜にそれをバラ播くこともあると云ふ本牧の女王——とにかく彼女は恐るべき女性である。

なればこそ、遠く海を越えた異國の人々までが、彼女の前で悉くへトへトになる。

本牧は海のそばだけに夏がいゝ。もちろんいつだつて悪からう筈はないが、夏の夜更けに薄物一枚の女を抱いて、踊りくたびれた體をヴェランダで汐風に晒す同情は忘れられない。金さへ不自由しなければ、ものゝ十位流連あつぱりしたつてビクともすまい。

紅毛碧顔の毛唐はよく流連をやる。女に取りまかれてホテルの浴衣を着て、しやなりしやなりとした姿をよく見せつけられるが。

「花園。荒すのは誰だ？」とタンカを切つてみたところが始まらない。

治外法權のエロ街では喧嘩にもならぬ。

いや、喧嘩の好きな人はしたつて構はないけれど、下手に喧嘩など吹きかけても、寄つてたかつてひつばたかれる位が關の山である。港街の人間は氣が荒い。

東京の不良が横濱に出かけて喧嘩しても、たいていぶん擲られて頭に繻帶して歸るのが多いから、喧嘩はなるべくしないこと。よけいなことだが一寸御注意申上げてをく。

いゝ悪いは別問題として、本牧の女はよく働く。よくもまアあれだけ體がつゝくと思ふ位働くので

ある。

「もつとジャンジャンのまないかい。」

「えゝ、妾しいくらでも頂くわよ。」

「どうだ少し踊らないかい。」

「えゝ、踊りませう。」

「どうだ疲れたから休まない？」

「ちやあベッド・ルームへね。」

一日のうち何時間かを踊りつゝけて、きつい酒をジャンジャンあふつて、そして男のいふがまゝになつて、それから又新しくのみはじめて、それから又踊つて……いや、實にこれを日に何回となく繰返し、それで餘りの時間は、電車の中や、東京の眞中に進出しているんなサービスを試みると云ふ——あゝ、これが不死身でなくてなんであらう。よくも足や手がコチコチにならないものである。

殊に、第一キヨ・ホテルなどは來客の五割乃至六割は外人である。

だから的外れのモボなどが、銀座裏のバーなどに行つたつもりで、下手に女を擁護つても彼女たちは頭から問題にしない。

それに比較すると、小湊の方は稍々大衆的であるといふことは、安く遊べると云ふ意味も含まれてゐる。

然し、安いのを御好みなら大丸谷などが面白からう。

大丸谷は外人居留地と並んでゐるだけあつて、エキゾチックな點に於ては唯一の歡樂郷だ。チャブ屋の看板も悉く歐文なら、出入する人間も殆んど外人である。殊に外國船のセーラーが多く、ベチャクチャ、ベチャクチャとわけのわからないことを喋り乍ら、印度人や、支那人や、ドイツ人、イヌバニア人、ロシア人、アメリカ人などが雑踏する。

これで女の種類もそれだけゐるなら上海に負けないが、惜しいかな對手變れど主變らずである。

色んな人種を相手にすれば、どんな女だつて趣味を帯びて来るのは當然だが、こゝに集まる女はもう最初から賤い。

東洋一帯を股にかけて飛び歩いた女もゐれば、あちこち茶れ廻つて喰ひ詰めた揚句落ちこんだのもゐる。

その豫則しがたいデカニズムが一種獨得の雰圍氣を醸し出して、それがマドロスやセーラーの氣持とピッタリ一致する處に本牧の所謂おもしろさがあるのだ。

デカタニズムとモダニズム、それに濃い異國情緒が織り込まれてジャズと踊りに夜があける。

東京方面から出かける人は大半は小湊で遊ぶ。蒲田の俳優、監督、文士、モボ、軟派の不良がワンサワンサで押かける。

第二キヨやウメノヤをはじめ、ホテルの数が十六七軒ある。

ウメノヤには眼玉の蒼い外人があると云ふので、文筆方面の人たちがラモン・ナバロウみたいに氣取つて押かけて行く。

噂にきけば大衆作家の〇氏などその最も熱心な一人で、まるで自分の戀人のやうに吹聴してゐるとかないとか。

なんにしても結構な話しである。

ところで、本牧に美人があるかといふと、こいつは少し四を捻つて考へて見なければ分らない。衣裳だけではどの女を見ても實に立派である。日本キモノにしても世間なみの女とはちがつて、朱なら朱、緑なら緑一色の振袖の錦紗、一色でなければ幅廣の布を二つ三つ継ぎたしたやうな大柄な着物に限られてゐる。

洋装も亦ズバ抜けて派手なものを好むのは職掌がら無理もないが、いろんな姿に變裝してゐることは彼女たちにとつてはパン以上に必要らしい。

今日日本キモノなら明日は洋装、その次は支那服と云つた工合に、頭髮の恰好もそれにならつて變化する。

女の姿が行くたびごとに變化すれば、遊ぶ方でもその度ごとに變つた女を對手にしてゐるやうな氣持になつて来る。

それも彼女たちの恰憫なサービスであらう。サービスと云へば體裁がいが、男をシボル手段だと

思へば不愉快でもある。

冠ふれ本牧の女のサービスはもの凄い。カフェーの女給などは足下にも寄せつけないやうな徹底ぶりだし、娼妓や藝妓よりは遙かに遙かに近代的である。

といふことは、相手にマナーがあると睨んだ以上、彼女たちはその全身から發散するすべての魅力を投げつけて、相手の男を遊がすまいとするのだ。

嘘だと思ふない、本牧のホテルのどの家でも漫然とはいつて見ればわかる。

はいつた以上は餘程、圖々しさと、恐るべき膽力と、神の如き忍耐力とがなければ、ウキスキー一杯のんで歸るといふことは出来まい。

### 本牧に降る金

雨の夜も、雪の夜も、本牧のホテルからはジャズの音が流れ、亂舞する靴の音が響いて来る。

本牧の眞夜中は他の街の宵に匹敵し、本牧の晝は普通の家々の眞夜中に匹敵する——と、かう言つ

でも敢て過言ではあるまい。

試みに夜更の本牧を歩いて見給へ。疾駆する自動車がるまゝで打重なるやうに混雑する。

この附近一帯に群がる三百の尖端ガールを慕ふて、モチやモボや、ゼントルマンやマドロスたちが火のそばに群がる夏虫のやうに集ひ寄るのだ。

こゝでは請求しなくても、最後のサービスが易々と把握出来る。

こゝでは踊り疲れても、疲れを癒すに足る萬全の設備が整つてゐる。

こゝでは酔拂つても、どうして家に歸らうかといふ乗客の不安が少しもない。

而もそれらの不安を悉く取り除いて呉れるものが、嬋娟胡蝶の如き舞姫だとすれば、それこそ地上の天國ではないか？

何の金ぞ惜しからう。

D ホテルのA子が云ふのである。

「くだびれたとか、眠いなんて云ふことは贅澤な人たちの云ふことだわ。いまの妾したちにはそんな

な餘裕なんてコレつばつちもないのよ。だつて一生本牧の踊り子でもゐられないでせう？」

「ぢやあ何をやるつもりかネ。」

「お金をためて妾しがホテルを經營するのよ。」

A子みたいなアバずれ女さへこんな氣持になるのである。

ホテルの儲けのボロさ加減が想像出来やう。

多い家で十七八人、少い家で六七人の女を抱えてゐるホテル經營者は、彼女たちが一人のお客を取らなくても食費と、税金と、道具使用料とで一人四十圓近い金をまきおける。おまけに、お客から貰つた約束額は六割又は七割、仲介料として差引かれる。

シヨート・タイム五圓ばつちのお客を、一夜に三人位づゝ取つてゐたのでは到底彼女たちの生活は支へ切れない。

三流どころの女の慘め。加減は、蓋し思ひ半ばにすぐるものがある。

H ホテルのU子に銀座進出の動機を訊くと

本牧に降る金

「あら、そんなこと訊くもんぢやないわよ！あんたもすいぶん野暮ネ。本牧の宣傳なんてのは！目よ。ほんとうは、ちつと家で燻ぶつてゐたのではやり切れぬの。ストリート・ガールなんて樂ぢやないけど仕様がないう。ホラ妾の靴下もう破れかけてるでせう。ホラ、この洋服は此の間の晩カクテルを浴びせられて穢くなつてるでせう。ホラ、靴だつてこんなに底がいたんでるでせう。ホラ……」

けれども、僕は女に同情することを最大の恥辱と心得てゐるやうな顔付で

「そんなものみな捨て、誰かに買つて貰ひたまへ」と言つてやつた。

けれども、中にはするぶん甘いのがゐて、シボられることを最大の誇りとしてゐる輩だつて多いのだから、本牧に降る金額は決して僅少な額ではない。

國産ビールが一圓なんてベラ棒な話はないが、ベラ棒がベラ棒で通るから有がたい。

一人の女が、三人の男から平均十圓づゝ使はせたと見て、一夜に九千圓、一ヶ月二十七萬圓、一年概算最少限度が約三百萬圓だ。

「妾し早くお金をためて、自分でホテルを經營するわ。」

DホテルのA子が云ふのも尤もである。

どうです諸君！我と思はん方々はU子のバトロンになつてやつては？顔はたいしてよくないが、脚の恰好は松竹蒲田の光喜三子よりも美しい。

それに甚だ好都合なことには、十二天あたりにはチャブ屋の賣物さへ出てゐると云ふ。賣物に出る位なら駄目だらうと思ふ人もあるか知れないが、景氣不景氣は女の撰擇如何にあつたから、あなから悲観する必要もありませんまい。殊に、これはと云ふやうな女の少い本牧では尙更のことネ。以上で一先づ本牧を引揚げやう。

### 横濱山之手風景

僕は最初は嘘だと思つた。

「嘘なら嘘でいゝから兎に角僕について來給へ。欺かれても散歩したと思へば諦めがつくだらう。」



槍本勘吉がさも自信ありさうなことを言ふから、今更僕も尻込みが出来ない。尻込みすれば又奴のことだから

「五十圓ときいて怯気がついたかネ」

と云ふにきまつてゐる。

然し、それでゐて矢張り僕は安心出来なかつた。一晚に五十圓投げ出すのもいくらか惜しいが、もし五十圓使つてそれだけの効果がなかつた場合のバカらしさを考へると、どうも尻がムズムズして落ち着かない。

もしこれが巴里だとか、上海だとか云ふのなら、それは僕も何等の心配なく五十圓が百圓でも投げ出したらうが、横濱の真中に世界各国の美人を網羅した秘密の家があらうなどは、それこそ今日まで夢にも思つてゐなかつただけに躊躇した。

「僕も君と同じやうに、そんなべら棒な所があるもんかと思つてゐたのだ。而も、今夜の君の場合と違つて、そのときの僕はたつた一人だけ。それこそ悪漢の巢窟にでかけてゆく名探偵のやうな氣

持になつて押しかけたのだ。尤も××バーの主人の紹介状は持つてゐたけれど、然しそれにしても僕が君に保證するやうな確信はないからな。」

「××バーと云ふのは伊勢佐木町にあるあそこの主人かい？」

「さうだよ！」

「だつて、あそこは給仕さへ女一人をかないやうな堅い店ぢやないか。」

「君も案外正直者だネ。そこがトリツクなんだよ！」

と勘吉が鼻を高くする。

これ以上疑ひを差挟むのは道樂道德にそむくことになるので、ザツツ、オー、ケーとばかり僕に威勢よく承諾した。

陽は疾ふに西の丘陵に没して、港の街には蒼い夜が冉冉とせまつた。

グラント・ホテルの一室でタキシードを着換へた僕と勘吉の二人は、わざとホテルの自動車には乗らないでタクシール拾つた。

總て自動車が外人居留地のある大邸宅の前で止まると、

「こゝだよ」と勘吉が元氣よく叫んだ。

なる程聞きしに勝る豪壯な構へだ。一寸見たところでは一等國の領事館とでも間違へさうな立派な建物で、立開いベルを押すと五十餘りの品のいい老人がインギンに僕たちに向つてお辭儀をした。

老人の案内で立開から二階の昇降口まで来ると、今度は又別の家令らしい老人が出て来て

「ウエル・カム」と氣輕に勘吉に話しかけながら、そばに取付けてあるベルを鳴らした。

これは大丈夫だと云ふ知らせの會圖らしい。勘吉の語る所によれば、リン、リンと鳴る場合とリリリリン、リリリリンと鳴る場合、その他いろいろの鳴らせ方があつて、それによつて、どんな來客かを知らしめるのだと云ふ。いや、なかなか用意周到なことだ。間もなく階上から三十四五歳のデッブリ肥つた婦人が降りて来て

“Oh! well come mr Yamoto,”と馴々しげに言つて僕たちを二階の一室に導いた。

こゝでは日本語は一切用ひないで、英語又はフランス語に限られてゐる。



機張の家ホランのダブスホーン

勘吉はなかく英語が達者だ。椅子に腰を下すや否や、もうマダムの額にキッスをして怪しからぬ話しに耽つてゐる。ところが、紹介された所によると、彼女に當家の女主人ではなくて、日本で云へばやりて婆さんだ。

さて、それから僕たちはどんな遊び方をしたであらう。

先づ此の家の室の数から御紹介申上ると、百疊敷位なサロンと、その倍位のダンス・ホールが壹階にあつて、三階には二十幾つかの秘密室、地下室には酒場とどんなインチキダンスでも出来る別誂へのステージがあり、ショート・タイム用のベッド・ルームや、特種な演藝場や、男女混浴の壯大なバスなどが電気仕掛の廻轉扉によつてかくされてある。

二階は主として家族の部屋にあてられてゐるらしいが、ざつと見たところで、女の数が三十人餘りアメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、南洋等、相手の御好みによつて自由選擇を許し、酒の御對手から、バスの中のサービス、ダンスの御對手、玉突のことまでその行届いた接待ぶりは至れり盡せりで、こゝにはいると何だか自分で自分が浦島太郎にでもなつたやうな心地である。

殊にダンス・ホールに於ては、自分さへ疲れなければ一人一人女を變へて踊ることも自由だし、又、女の方でもこれが自分の客とはきまつてゐないやうにどれもこれも親切だ。

かくして、各國の貴顯紳士が一堂に會してそれぞれ酔拂ひ、ふざけ、喚き、キッスの雨を降らす状態は、これぞまさしく別天地、別世界であると言へやう。

外國船の船長を始め高級船員、實業家、大使館の吏員、それらの人々が何も彼も忘れてすべての歡を盡してゐるのだ。

一人や二人は日本人も必ず来る。

寢室から夜具の類、室内の裝飾から女の衣裳、何一つとして申分がない。

とりわけ、うつゝを抜かして愛想よくして呉れる彼女たちのサービス——その點だけは日本のカフェーの女給も、本牧ガールも、このウォールド・ハウスの女には叶はない。

夜が明けて太陽が東の海上にポツカリ浮ぶと、たいていの人間は

「もう五十圓使はふかな」と思ふであらう。

「どうだ、気分は？」

勘吉の鼻が一寸位高くなつた。

「悪くないね。兎に角、横濱の真中にこんなところがあるなんて珍らしいよ！」

地下室のバーで高價なカクテルを飲みながら、流星の僕も一寸どきもを抜かれた。

勘吉の奴はさも獵奇マンらしく、唇の厚い黒んほの女を抱いて、一杯のカクテルを三人で交る交るチビリ／＼と飲んでゐる。

ジョセフィン・ペーカーにひどく感心してゐる勘吉の野郎は、對手がくろんほだとみんなジョセフィンみたやうな氣持になるのであらう。

眼玉のギョロリとした點や、眞黒い唇や、その奥のとりわけ白い齒並は見ると何だか薄氣味が悪いが、くろんほの乳房だけは一種異様な魅力を備へてゐる。

奴等が餘り仲いい、所を見せて呉れたお蔭で、僕の側にゐたアメリカ美人——アメリカ美人と云ふと體裁がいゝが、上海あたりをうろついでゐたサアカス上りの女だ——も

「妾しにも頂戴よ！」

と僕の首に両腕を投げる。かうしたポーズは矢張り日本の女より外人がうまい。酔拂つた後とても嬉しいのがダンスだ。あれがいけないの、かうすれば怪しからんのと云ふ社交ダンスと違つて、此處のブルーズやタンゴと來たら、踊りと云ふよりも寧ろ躍動しると云つた方がふさはしい。

お上品もスマートも糞喰へである。こゝの亂舞狂爛に比較すれば、東京のダンス・ホールなんかまるで見戯に等しいものだ。

トーキー映畫の八釜しい場面は、日本人が聞いても何が何だかわからないが、ウォールド・ハウスの舞踏場と來たらそれ以上である。英語、フランス語、ドイツ語、いろんな發音がジャズの騒音の中に交錯して、どんな語學の達者な日本人にも珍ぶんかんぶん分らないのである。

面白いから踊ると云ふよりも、くたびれる爲に踊つてゐるやうにさへ見える。

パリやベルリンの一流ホテルにあるやうに（尤もこの場合のホテルとは云ふまでもなく日本の青



神戸の闇に咲く異國の花  
上圖 支那娘。下圖 臺灣娘

或る男が、例の車夫を知つて居たので、その案内で、「ナンバー・ワン」へ出掛け、ドアをノックして、出て来た男に交渉して、一遊を試みたと云ふ話だが、これは一寸信用出来ない。

此の家は倉庫の二階の様な所だが、中は仲々奇麗にしてある。昨年はイタリー女二人と、ロシア女一人居たが、勿論増減がある。多い時は向ふ側の花柳病の醫者の階上を借りるとの事だが、如何にもこいつはうまく出来て居る。



三宮三丁目の國際怪屋「ナンバー・ワン」と此家の「ナンバー・ワン」(神戸新聞「三の宮」巻一参照)

樓である)ウオールド・ハウスのスペシアル・ルームもなかなか凝つたもので、諸君が一夜に二百圓も使ふつもりなら、魂が宙にふらつく程いろんな設備が施されてある。

兎に角、彼等の遊びは素晴らしい。而もこの巨大な建物は二三のアメリカ人に依つて、一種の社交場として建築されたものだ。だから日本の青樓とか待合などは、その組織がちがつてゐる。

こゝに集まる女も亦娼妓や藝妓みたいに年期勤めの人間ではない。勤吉のいふところに依れば、チヤンと別に家を持つてゐて、毎夜の如く集まつてくる秘密クラブだと云ふことである。だから、此家以外の場所では顔を合はすやうな場合があつても、決して馴々しい句調で話しかけたりなどしてはいけない。

謎の家は飽迄謎の家として置いた方が面白いのである。

### 海邊のエロ風景

夏の間はレヴューそのまゝの大舞臺だ。スポーツ熱が旺んになるにつれて、若い綺麗な女たちが

我も我もと水泳をやり始めた。

夏の海邊が雄大なる歡樂郷として世人の注目を惹くやうになつたのは、これ悉く彼等娘子群のお蔭である。

長汀白砂を洗ふ波打際に、幾百幾千と林立する若い女の眞白い足！

街の眞中では到底見ることの出来ない艶つほい姿が、夏の海邊では一厘の料金も要らないで自由に饜賞出来るのだ。

だから、水中に入れば金鍍みたいにブク／＼と沈んで了ふ禿の紳士や、額に四海の波を張つてるモヂさんたちまで、さも水泳の達人のやうな顔をして海水着一枚でウロ／＼する。

而も、彼等の視線がどこに注がれてゐるかを注意してゐると、どれもこれも云ひ合はせたやうに若い女たちの肩から腰、腰から足へと下つて行く、

わけても横濱附近は理想的な海水浴場が到る處にあつて、鎌倉などは夏になると十萬人の人間が殺到する。

さて、これだけの人出があると、男も女も、まるで桶の中で芋でも洗ふやうにコツき廻されるが、それが又嬉しくて耐らないのだから始末が悪い。

夏の海邊はこれ公然と許された男女混浴で、而も頭上には赫灼たる太陽が輝いてゐる。

たちの悪い女になると、殊更薄い肌着をつけて、それがビシヨビシヨに濡れると、逆もちつと見てゐられないやうな姿を、さもこれ見よがしに晒すのである。

少し勇氣のある獨身者は、戀人をつくるには夏の海邊が最も容易いと豪語する。

先づ彼は、漸つと泳げるやうになつた若い女の近くで泳ぐのである。

大きな波がザアツと押寄せて來た時、サツと波を乗切る様な恰好をして、いきなり自分の體を近くの女にぶつつける。

「いやあ！どうも失敬しました。」

もし此場合、對手が溺れかけでもしやうものなら、それこそ天恵とも云ふべき絶好のチャンスだ。直ちに彼女を抱きあげて、浅い所へつれて行く。そして、水泳のコツをいとも叮嚀に教へてやると

彼女に戀人がない限り、十中八九までは彼と彼女の戀が成立する。

但し、これは不良少年のよくやる手で、取締當局では、夏になると毎年頭痛の種になると云ふ。毎年夏になると、東京の不良少年少女が千葉や、神奈川の海水浴場に繰出す数は數萬人を越えると云ふ。

名家の令嬢たちが、最も誘惑にかゝり易い場所はその大半は海水浴場で、飛んでもない不良の徒に貴重な貞操を穢される例は實に多い。而も、彼等不良はうまく偽大學生になりすまし、××大學水泳部選手など、吹聴するから、少し意志の薄弱な女になると、すぐに戀の熱病にとり憑かれて了ふ。殊に、平素の生活に於て種々自由を束縛されてゐるだけに、一旦解放されたとなると、その勇氣たるや實に暴虎河を渡るの氣慨がある。

有名なK婦人科病院へは、富貴權門のマダムや、そのマドモワゼルたちが暮夜ひそかに門を叩くがその數きはめて夥しく、驚いたことには淑女であり處女であるべき筈のマドモワゼルは、その六十パーセントまで既に蓄積散らしてゐるとのこと、そして、その時期を考察すると、七八月へかけての秘

密遊戯が最も多いといふから、海と彼女たちの關係が明かに想像されるではないか？

夏の夕方、本牧の海岸を散歩すると、よく外人たちが男女入亂れて泳いでゐるのを見る。それは、見るからにして愉快さうで、日本の人間には一寸氣恥しくて出来ないやうな藝當でも、彼等は平氣で水の中で演じてゐる。

それと反對に、最もいちらしいのは、大森や新子安の海岸などで見る女學生と中學生のエロチカル・シーンである。

殊に、潮が引いて膝頭まで位る海水のある時はいちばん愉快だ。

水が淺くて泳げないから、彼女や彼等はそれぞれ座して貝を拾ふ。

最初は相當の間隔を於て双方からウインタシ合つてゐるが、いつの間にか彼等は車座になつて貝を掘る。

何と愛すべき情景ではないか？

兎も甚だ海水浴場は元氣若返り法の公開場所だ。ランデ、ウシの最適地だ。



男も女も、互ひに眼を異様に輝かせ乍ら、スポーツマンらしく氣取つてゐる姿を見るだけでも愉快である。

今に日本でも水中に喫茶店の屋臺店などが出來て、女がジャブジャブと水中を裸になつて歩みながら、コーヒーや紅茶を運んで呉れるやうにならぬとも限らぬ。

それだけでも立派なサービスとして尊重していいではないか。

……

……

……

……

第四編 神戸歡樂郷案内

## 第四節 神戸煉炭廠案内

### 波止場附近のガイド

神戸の生命は、あのエキゾチックな賑がさである。

歐羅巴一帯はもちろんのこと、印度、南洋、支那あたりから来る外人客は、いやが應でも神戸で下船するし、その反対に、日本から出かける人は否が應でも神戸から乗船しなければならぬ。

だから僕たちが歐洲から歸つた場合でも、アメリカ經由でない限り神戸で下船するのは當然だ。さて、その神戸といふところは果してどんな所か。

日本全體の輸出入總額の六十パーセントは神戸であり、東洋隨一の開港場なのだ。外人の多いのも日本一なら、細くて長い街の形も日本一か？

併し、そんなことをボクたちにとつて左程うれしいことではない。

神戸でうれしいのは、あの底無落のやうな、えたいの知れぬ秘密境である。

ミス・マコハラの色彩が飽きずアメリカ式であるのに反して、近代都市としての神戸の色彩は、インテ

「チシヨナリズムカクテルだ。だから、神戸のモガに云はせれば、一切の流行に對しては神戸の女がいちばん敏感だと威張るのである。」

けれども、そんな空威張りをしてみたところが、矢張り洋装のスタイルは關東がいゝ。と云ふと「コラ、あんまり神戸の人間をナメるな。つまりんことベラベラ喋舌つてけつかると、バチンコ（ピストル）でひと思ひ殺つてまうたろか。」

と、例のバラケツに凄文句で脅かされさうだが、併し事實は飽迄事實である。

ところでその秘密境であるが、神戸のエロ・グロ方面の正體を掘み出すことは、永年神戸に住んでゐる人間でも知らないものが多い。もちろん、さういふ僕自身だつて神戸の地理には詳しく知らないのであるが、いくら地理の詳しい人だつて知らない人はまるつきり知らない。

先づ順序として神戸のガイドのことから話しをすゝめやう。

最近でこそ大きな都市の客引は殆んど人力車夫が副業的（或はこの方の収入が正業よりも多いと思ふが）に獨占してゐるが、その一部分は今尙ほ依然として、職業的ガイドの一團が根強い網を張つて

る。この一團は神戸のガイド界を支配してゐる。その當分の勢力は、この當分のガイド界を支配してゐる。

殊に、神戸は昔からこのガイドの出没は有名なもので、なかには四ヶ國語ぐらゐる平氣でベラ／＼と喋舌る人間がいくらでもゐる。

ボクなども往々にして外人と間違はれ易く、神戸のガイド君にはいとも町重な態度で英語で話しかけられた経験がある。

「メリケン波止場や、外人居留地の辻々には今日でも旺んにガイドが出没する。それが比較的の間へ知れないのは、彼等は日本人をてんで問題にしないからだ。」

規則的に習つた語學でないから、それがブロクンであることは云ふまでもないが、然 要領をハツキリさせる點に於ては、専門學校出身者と雖も到底彼等の足元にも及ばない。

近頃ではガイドの収入著しく減少して歐洲大戰當時の夢は見られなくなつたといふが、その頃は、多い月で四五百圓、少ない月でも二三百圓にはなつたと云ふから、ガイド、ガイドと馬鹿には出來ない。

外國の氣船が神戸の港に入港して、マドロスたちが上陸する時刻を見計つては、それを待伏せして  
旺んに誘惑するのであるが、交番の前を歩く時などでも平氣で肩を並べて勸誘出来るのだから樂な商  
賣である。なせつて、彼等がどんな會話をしたつて、なか／＼交番の巡查には彼等の話は理解できな  
いし、ガイドだつて相當のゆゑつとした身なりをしてゐるのだから、彼等が何を語り會つてゐるか、  
理解出来な以上訊問することも出来ないではないか。

「今貴様は何を話してをつたか。アーン。」と訊いてみたところで、

「あちらの面白い話をきいてみました。」と答へれば、

「さうが、それに間違ひないか。アーン」

といふより如何とも方法はないのである。

そんなわけで、警察でもまゐぶんガイド檢舉には苦心したが、要するに苦心するだけで、彼等は公  
然と身分たちの仕事にいそしんでゐるのだから世話もない。

なにしろ戦時中の神戸は成金都市と言はれた位だから、あの當時の景氣ぶりと來たら全く素晴らしい

ものであつた。

餘談に亘つて恐縮するが、その面白いエピソードを二つ三つ紹介すると、今の政友會代議士内川信  
也君などもボロ船ブローカーでしこたま儲け、一介の會社員から一躍大會社の社長に躍進し、須磨の  
別邸へ据える庭石を京都の鞍馬川から運ぶのに、一個一萬圓の運搬費をかけて八つも据えたといふか  
ら豪勢なものだ。

湯淺商店の社長が中山手に五十萬圓の自宅を建て、山下汽船では社員のボーナス五十ヶ月分なんて  
まるで喰みたいな話しが實際に行はれたのだから仕方がない。

又、先年日本の財界に一大センセーションを捲き起し、モラトリウムまで惹起せしめた鈴木商店な  
ども當時が全盛時代で、鈴木ヨネさんの一人息子、岩吉とか岩平とか名前は忘れたが、このドラ息子  
は素晴らしい豪遊を連日連夜かゝさなかつた。店には御大金子直吉氏が頑張つてゐるが、餘り怜悯でも  
ない癖に鈴木の子息は會社に出たがつて仕様がな。そこで直吉氏が

「あんたは家でおとなしう遊んでゐなはれ。店のことはちつとも心配することないさかい。小遣が

要ればいくらでもあけます。一日千圓小遣をあければどうにかかうにか間に合ひまつしやろ。」  
一日千圓と云へば月に三萬圓、一年に三十六萬圓の小遣だ。だが鈴木の子息は考へた。

「一日たつた千圓か、千圓ぢやちいと心細いぜ。」

と言つたといふから、なんと開いた口が塞がるまい。

それから、現在も湖川新開地の角にある聚樂館だ。今でこそ下らない活動寫眞館になり下つたが、あれを建てたのはマツチ王瀧川儀作を始め神戸財界の巨頭連で、

「この劇場は我々の娛樂機關にしてもかまはないので、芝居をやつて見物人が一人も入らなかつたら、我々の家族だけで見ることにしやう！」

と、神戸の貧乏人どもの度膽をつぶしたものだ。けれどもいつの間にか彼等の大法羅もそのまゝになつたらしい。

そんなわけで、神戸の街は夜も晝も初き返るやうだつた。

某銀行の頭取が、福原共立檢の名妓いちまにすつかり惚れこんで、一晚の特別祝儀に一萬圓投げ出

したのもその頃である。

一萬圓投げ出したことは、僕たちが五十圓出す程の痛痒も感じないのだから何でもないと、その相手の藝妓の云ひ草が愉快なのである。

「へん勘忍しとくんははれ。一萬圓バツチの金でけんたい面をされてはやり切れまへん。」

と、女將や周圍の人々の切なる勸告をものゝ美事に突つ放ねたのである。

勿論、彼女としては柳原藝妓に對する面當もあつたであらうが、兎も角共立檢をして名を爲さしめ當時轟々たる反響を呼び起した。

かうして拜金主義全盛時代に、名妓いちまは敢然として唾を吐きかけたが、一般のならばははさうでなかつた。

普通の遊びではつまらなくなつた人間が多くなるに従つて、彼等の要求を聞き容れる私娼の拔扈が著しくなり、大神戸が魔境と稱されるに至つた素地を完全に形づくつた。

そして、この私娼窟とガイドの堅い握手によつて、神戸の私娼は實に猛烈な飛躍を始めたのである。

こゝに大戦當時のいろ／＼なエピソードを拉し來つたのも、要するに神戸魔街の一大轉機がその頃にあつたからに他ならない。

現在神戸にゐるモグリのガイドは、その數凡そ百人位とも云ふし、いやもつと多いといふ人もある。然し、ガイドを専門的な職業として生活してゐる人はせいぜい四五十人が事實らしい。

今日では外國のマドロスたちも伶俐になつて、ガイドの手を煩はさなくてもチャンとニッポン娘の巢窟を知つてゐるのだ。

いや、日本のマドロスたちよりも彼等の方が詳しいかも知れない。

もし諸君のうちで神戸の仙境を探りたい人があるなら、三宮驛あたりの車夫にその旨を言ひ含めれば、萬事呑みこんでいゝ所へ案内して呉れる筈である。

然し、彼等が案内して呉れる所は、極めてありふれた娼家で、ナイト・クラブ式な魔の家は矢張り専門的にやつてゐるガイドの手を煩はさないと駄目である。

彼等一味の中にはなかく勇敢なのがあるて、外國船が入港するといち早くランチで乗りつけて契約

して來るのがある。

嘘かほんとか保証は出來ないが、ガイドなんてまだるつこいといふので、入港した外國船へ單身乗りこんで行つて貞操の切實をやつてゐる尖端ガールさへ出現したといふ。但し、下級船員は對手にしない。對手にしたくても、下級船員は自分だけの部屋をもつてゐないから都合が悪い。

さう言へば日本の船が外國の港に入港しても、チャンと女の方から船へやつて來ることはありがちなことだ。

こんな賣笑婦がジャンジャン増えて來ると、ガイド商賣はあがつたりになる日が來ないとも限らぬ。

第一その方が手取早く問題を解決するし、たとへ二割でも三割でも、仲介料をせしめられないだけでも氣が利いてゐる。

ところで、ガイドの話はこれ位にして先へ進まう。

## 港街の仙境

仙境なんていふと、景勝絶佳の地と感ちがひされる方があるかも知れないが、仙境は仙境でも仙女のまします所だから、あだやおろそかに聴いて貰ひたくない。

前にも云つたやうに、神戸の秘密境はどこにどんな風な仕掛のある家があるか分らないので、よほどその道の明るい通人でも

「ほほう、そんなところがあるのかネ」

と、後になつてビックリするやうな家が次々と現はれて来るのである。

いまでこそ圓タク圓タクと安つほけにいふが、神戸全市を通じて自動車の数が百五十臺しかなかった頃ですら、自動車を乗り廻して春を賣つてゐた女がゐる程だから、その徹底した物産さは他の都會ではちよつと眞似が出来まい。

現在でもナイト・クラブの活躍は恐らく神戸が日本一で、凡ゆる外人を網羅したウォールド・ハウス

にしたつて横濱よりも神戸の方が先に生れた。

だいたい横濱歡樂郷で述べたのと同じやうな構成だから、再びこゝに繰返す必要はないが、場所は山手の東亞ホテルの附近である。

そのほか、外人の享樂機關は幾つもある。日本のマダムや、富豪の令嬢たちが旺んに出入する立派な社交場もあるし、髪の紅い、眼の蒼い坊やを生んで、日本人放れの藝當を演ずる女だつて相當ゐる。

以前から、三宮驛を中心にした元町裏通、北長狭通、生田町一帯は神戸の密淫賣地として、その名海外にまで響いてゐるが、堂々たる鐵筋コンクリート造りのホテルみたいな家もあれば、チヨンチヨン格子風のちやちな家、安つほけなバー、怪しげな小料理店等々、その種類に千差萬別である。

従つて、密淫する女だつてピンからきりまで差別はたいしたものだ。或ひは眼に角を立て、ブンブン怒る御仁もあると思ふが、二十歳過ぎてアパート住ひをしてゐる女は、十中七八までは淫賣婦と見て差支へない。女一人でアパートに住むといふことが、既にその女のふしだらを物語つてゐるのだ。尤も、女ばかりのアパートはこれは別問題にすべきかも知れぬが、その中にさへするぶん如何はしい

のが多いのは誰が何と云つたて争へない事實だ。

つい話が脇道にそれたが、夜遅くなつて三宮驛を歩いて見給へ、諸君は必ずどこかで女の呼び聲を聴かされるであらう。元町の裏通り、驛のすぐ近くにある穴門からダラ／＼を上つたところ、鐵道線を通れば、諸君の姿が非常に見すほらしくない限り、決して女は見逃しはしない。若し、誰一人として聲をかけて呉れる女がなかつたとすれば、それはその人が刑事と間違へられたか、でなければ素寒貧となめられたか、いづれにしても甚だ芳ばしくないこと、深く深く反省してみらるゝ必要があらう。

關西の女も最近殆んどその言葉に東京なまりを入れるやうになつたが、これは頗る面白くない。關東關西のチャンボンよりも、關西女は關西女らしく、例の甘えかゝるやうな聲をしてゐる方が、藝妓以外の女性は殆んど東京辯を使はうとする。以ての外の不心得である。が然し、そんなことはまア如何でもいゝとして、たとへば穴門の先の方で

「ちよいと兄さん、遊んでつて頂戴ナ。もう遅いからうんと安く遊ばせたけるわ。」

と女から袖を引張られたとする。さうした場合に全身に寒氣を感じるやうな人は、もうこれから先を讀まないことである。

すべて道楽といふものは學問と同じやうに一步々を修業を積み重ねてならぬ。

かうした場合にぶつつかつたら、たとへば中には五十錢玉が二つしかなくて、對手がチリ紙に猿を書いたやうな女であらうと、大膽に、勇敢に倭約交渉を開始するだけの勇氣がなければならぬ。

「ふむ！そいつはあねがたいナ。面白い遊びを擲してゐたところなんだ。」

「あら頼母しいわねえ。まアどうでもいゝから中へお入へなさいよ。」と。

入れといふ以上は堂々と入つても別に竊宅侵入罪にはなりつこない。

「どう？泊つてゐらつしやらない？」

「泊つてもいゝがこゝは宿屋かネ」

「あらじれつたいわねえ。そんな冗談はお止しなさいよ！兎に角何かめし上らない！」



「召し上つてもいいが、實は金がないのだ！」  
 とこの時始めて五十錢玉二つしかないと白状する。そして、その五十錢玉をボンと氣前よく相手の女に呉れてやるのだ。

「で、今日は遊ばないで失敬するが、明日の晩は必ず来るよ！」

と、だいたいの費用、遊びの方法など聽いてその晩は歸ることだ。然し、その翌日は時計や着物を質にたゞきこんでもいゝから、洋服着用に及んで再び出かけて行かねばならない。かくして、その女からいろいろなことを探り出して、どこにどんな面白い家があるとか、その面白い家ではどんなことをやつてゐるとか、若しその女がさうした家に入出入してゐれば紹介して貰ふとかいふ具合に、騒がずあせらず、探奇の心を猛然と振り起すのである。

たとへば三角張場の近くにある××ホテルだ。普通の客として泊つたのではボンヤリと一晚退屈な時間をすごさねばならないが、この附近の女に紹介してもらつて同伴で泊りに行くと、どんな珍らしい事件が展開しないとも限らない。

なぜと云つて××ホテルは表面は堂々たる旅館であるが、探奇派の外人たちが秘密遊戯に耽る場所として有名である。

經營者のマダムも外人の妾になつてゐる位だから、酔いも辛いも呑みこんでゐる。なべて自からを耽奇派の一人と自信出来るほどの人は、たとへ一度でもかゝるチャンスに恵まれたら、なにはさて置いても其家の女將と心易くなるのが絶対に必要だ。遊びの上手下手は、遊ぶ人々から充分に信頼させるコツを忘れてはいけない。相手に不安さへ抱かせなければ、どんな秘密にも心易に探し出されるし、秘密境に入つてほんの一ペンの遊びをして来る位なら、最初から貸店遊びや、女郎買位で満足してゐる方がよつほど氣が利いてゐる。

××ホテルへは外人だけでなしに日本の金持連も出入する。ホテルの中には別にお抱へ女といふものはないが、外部の女とは充分に連絡がとれてゐて、それこそ關西の靡言葉ではないが、百の百、千の千である。マダム・オーケー、ムスメ・オーケーである。

さてかうなると、わざ／＼バリーあたりへまでナイト・クラブの秘密を探りに行く必要は毫頭座らぬ。

だから、我々がどんな立派なホテルに彼女と泊つても、扉が閉めてあると思つてうっかり油断してはならない。壁と同じ色の布幕だつてあるし、或ひは天上に、或ひは壁に、いかなる覗き穴がつくつてあるか知れたものではないのである。

その他××ホテル以外にも乙な家はいくちもある。なかには女將自から陣頭に立つて愚連隊を指揮してゐるものもあるし、小さなカフェーの割に部屋が多い家などみなそれだ。

たゞ横濱の本牧みたいにジャズだ、タンゴだ、ブルースだとジャンジャン大つびらにはね廻つて、寝れると「サア、どうぞベッド・ルームへ」といふわけにはゆかないが、その内面的飛躍に至つては、その深刻さ加減驚歎に値するものがある。

なにしろ外人が多いのだから、警察の手加減も生ぬるい。外人の落して行く金だつたらいくら落して行つてもいゝといふ腹もあるし、對手が外人ではうるさいといふ腹もある。

三十圓も出せばかなり思ひ切つた遊びが出来るから、後學のために一應は遊びに行つてもいゝ場所である。だが、三流以下の家では往々にして満員の場合があるし、女のたちもよくないことを豫め断はつてをく。

なにしろ神戸の魔窟には上海あたりでゴロゴロして来た女が多いから、サービスもなかなか味なことをやる代りに、財布を空つほにさせることも達者である。

さて、それでは三宮附近以外にはもう面白い所はないかといふと、なか／＼どうして。上筒井の屋敷町や、奥平野の屋敷町には、立派な由緒ある人の未亡人が經營してゐる隠れ遊びの場所がいくちでもある。

熊内川の上流、布引の瀧を下つた山麓には會社の重役連だけが出入する秘密クラブがある。こゝは外人も寄りつかないし、年中酒と歌とに憂身をやつしてゐるやうなフツツパドなどは寄つかない。

盛業の高い安月給取の妻君や、お琴の稽古や、お花の稽古にゐらつしやる何々家のマドモワゼルだつて忍びがくねに入るのである。

奥平野の方は主として高級船員がたが多く、各地の商船校同窓クラブと一脈の連絡があるやうに聴いてゐる。

それからストリート・ガール（關西では白首といふ）は諏訪山公園、長田神社、青谷附近に現はれるが、諏訪山公園が最も多い。

けれども、これらのストリート・ガールには餘程注意しないと、その背後にバラケツがゐて、飛んでもない美人局のワナにかゝることが往々ある。

賤娼婦の出る所は北本町の裏側、俗に新川の貧民窟で知られてゐる所や、宇治川の貧民窟などである。

新川の賤娼婦に就ては賀川豊彦氏の「死線を越えて」の中にも詳しく書かれてゐるし、外國の賤娼婦ほど興味がなから、賤娼婦のことなどはこれ位のところで止して、神戸のバラケツに就いて少し述べやう。

### 神戸のバラケツ

バラケツとは不良青少年のことである。

バラケツに軟派と硬派との別あることは諸君が萬々承知の如く、色と喧嘩の二派である。

バラケツにもいろいろあるが、色街のお抱へ用心棒が最も幅を利かす。神戸といふ所に妙な所で、一流のカフェーと見做されてゐる家でも、チャンとお抱へのバラケツがゐるし、ひどいになると店のスタンダへバラケツの兄い株を立たせてゐる家さへある。

そしてつと面白いことは、湊川新開地附近を根城にしてゐるバラケツと、三宮附近のバラケツは鋭く對立してゐて、時たまカフェーの中で東西のバラケツが亂闘する。

年齢も三十歳位のバラケツがざらにゐるのだからおかしな所だ。古株の下には若手のバラケツがゐて、新開地あたりでよく喧嘩を賣りつけて酒代をせしめる。生意

氣な女給があるとそのカフェエをいぢめぬく。

喧嘩を賣りつける奴に、往來の頻繁なところで、自分より弱さうで金があると睨んだ男に、いきなり體をぶつつけて

「やいこら、お前なんの意根があつて俺の體にぶつつかりやあがなねん、おかしなことをさらしくさるとカンカンといつてまうぞ。」

カンカンといつてまふぞといふのは、ボカトンと張り倒すぞといふことなのだ。

タンカがきれいなので一寸どきまぎするが、下手に出ると隙限なくつけ上つて來ること昔の街の縁ぎの雪助のやうだ。

「なんでもえゝさかい、その暗いとこまで一寸おいで、文句があるんならそこで聴かうやないか」と、刑事に見つけられないやうに早いとこ路次の暗がりへ引張りこんで、一パイありつくまでは舌縫れのタンカを止めないのである。

又、女給が少しでも不埒な態度を見せるとその翌日から仲間を多勢つれて無言の逆襲を試みる。つ

まりコーヒー一杯で店の席を全部占領して了つて三時間でも四時間でも動かないのである。いちばん忙しい時間を狙つてこいつを四五日つゝけるをたいいてのカフェエで參つて了ふ。

さうした事件が非常に多いために、經營者の方でもつい土地のバラケツを利用するやうになつて、バラケツの兄い株となると酒は無料でのめる、女給はなびくと云つたわけで、數年前の女給は必ずバラケツを情夫にもつてゐた時代さへあつた。

東京の不良は手が早い、神戸のバラケツはタンカを切るのがながい。

「わいを誰だか知つてるか。かう見えてもこれでちよつと凄いのやぞ。短刀やピストルには驚ろけあへんよつて、文句があるなら云ふて見ろい。指の三本や腕の一本位ちつとも惜くはないのやさかい、やるつもりならなんなりともつて來い！」

と言つた風な調子で、お互ひにぶん擲り合ふまでには支那の外交官みたいに暇がかゝる。然し、その癖、一人では決して強い口は利かない。

もう二三年前のことであるが、東京の不良學生が新聞地の真中で神戸のバラケツにタンカを切られ

た。懐手をしていまにも短刀か何かを掴み出しさうな形勢である。

「いつたいお前らどこの馬の骨や？うだうだねかすとこれやぞ。」

と反り返るやうにして懐をふくらませたものである。

東京の不良はニヤリと笑った。

「チエツ！ふざけやあがるな。短刀やピストルが恐くて街の真中が歩けるかい。人を見てものを言やあがれ、この間抜け野郎！東京ハート團の木村とは俺のことだ。」

勿論これは出鱈目であつた。にも拘はらずそれまで強さうにしてゐた神戸のバラケツは

「いやあ、あんたはんがハート團の木村はんだつか。名前はよう聴いとりまひてン。いやこれは、これは……」

と言つて大盤振舞をしたといふ話である。

### 日曜日の戀と登山

冬は寒いからふさはしく、いが、夏の朝の朗らかな日、戀人の手を引いて山に登る楽しさは格別である。

戀人同志のためには神戸ほど恵まれた土地はあるまい。

戀人がランチ、ヴーを承諾しても、いちばん困るのは場所の選定である。たつた二人だけで誰にも氣附かれないやうな場所といふものは、泊りがけで出かけない以上さうさう容易く見當らない。

殊に、女が夜は早く自分の家へ歸らなければいけない状態にある場合は、彼と彼女は只いららするばかりで甚だ面白くないものである。芝居もつまらないし、公園も人が多い。

「山があつたらなア！」

東京の戀人同志は、いつも近くに山のないことを歎いてゐる。

それが神戸はどうだ。再度、摩耶、六甲の三山を控えて、彼と彼女はどんな處へでもかくれることが出来るのだ。

夏になると再度山に登る人は極めて多い。諏訪山公園のすぐ麓が再度山の登山口になつてゐて、日

曜日以外の日でも、数百人のサラリーメンたちが出勤前の時を利用して長い長い列をなす。

山は高く、深く、おまけに老松巨木が鬱蒼と繁つてゐるし、冷やりとした空気は満山を壓してゐる。

最近では若い女事務員やタイピストたちまで、雄々しい男子の列に伍して登つて行く。

岩の上、溪間の蔭に赤い赤い花が咲く。彼と彼女の戀の花が……

戀人同志はいゝ、加減に登山道を歩いたら、ぐんぐん密林の中へ姿を消す。叢は彼等をまもり、彼等は互ひに息を呑む。四隣寂として、聽ゆるものは只ひようひようたる風の音と水の流れた。

これほど安上りのランデヴーが他にあらうか？ 彼は彼女と共に喰へるお辨當の用意と、彼女をして明らかならしむるために一瓶のカクテルを携へてくればそれでいゝ。

摩耶の登山者も年々歳々増える一方で、こゝは西國三十三ヶ所第何番目かの靈地である。だから戀人同志は餘り摩耶山へは上らない。靈地を穢すものには恐ろしい祟りがあると云はれるし、いくら何でもお宮での密會は氣がひげやう。

だから、そんな場所は敬遠しても、神戸の戀人同志はいたる所に身を隠す場所を恵まれてゐる。熊

内二丁目で市電を下車し、布引の瀧を見て、それから山奥深く入つてもいゝし、須磨の方へ出かけてもいゝ。

兎に角、夏の日曜日には、去戀氣取りで山を歩いてゐる若い男女に必らず三組や四組は出會はすのである。

山は一錢の席料も取らないし、一厘のチップも不要である。

もし再度山みたいな山が東京の新宿附近にあつたとしたら如何であらう。あまりに登山者が多すぎで、結局ない方がいゝと云ふことになるかも知れぬ。

夏が来るたびに、神戸の街がなつかしくなるのは、あなたが僕一人だけの経験ではなく、神戸に二三年も住んだことのある人は誰でもさう思ふであらう。

海と山、二つ乍らに恵まれた神戸の戀人同志は幸福である。

特別な野心さへもたなければ、諏訪山公園など最もふさはしい嬉曳の場所で、夏の夜など若い男女の二人づれが、その木影、こゝのベンチに相寄り添ふて囁いてゐる。

眼下には明るい夜の神戸の街が展げ、港には船の灯が螢火のやうに明滅する。

「チエツ！うまくやつてけつかるナ。」

闇の中を忌々しさうな聲が飛ぶのも、端で聴いてみると滑稽である。

藝者をつれた若旦那、活潑なモガとニヤケたモボ、女學生とバラケツ（不良）などが、春から夏へかけて諏訪山公園を占領する。

そして、彼等は暗い場所、暗い場所へと進んでゆく。

山の戀は神秘的である。

### 神戸の明暗近代色

#### 上筒井の巻

どこ迄も近代性の明るみを求めて發展するミス神戸。上筒井の原つばが今日のやうな大歌集舞臺にな

らうとは、お釋迦さまでも御存知なかつたに違ひない。

神戸高商と、關西學院の存在することによつて、僅かに市内の一隅を穢してゐた上筒井通の今日の賑はしきは如何です。

阪神急行の基點として、寶塚行の乗場として、今や上筒井は新開地に次ぐ盛り場となつたではありませんか。

殊に日曜祭日などのあの雑踏ぶりをごらん下さい。それはまるで戀の行列とも云ふべき明るさです。

ランデブーに出かける男女を乗せた數十数百の自動車や、女を待つ男、男を待つ女、二人づれ、三人づれ、若夫婦、老夫婦、いやはや誘致すべき明らかさです。

すぐ近くの青谷は昔から男女の密會場所として有名なもの、現在では立派なホテルが出来て、彼と彼女等を待つてゐます。

摩耶山の登山口もこの近くだし、摩耶ホテルへ疾驅する自動車も夥しい。

以前は古本屋と文房具屋ばかりバカに澤山あつた街だが、今日では右も左もカフェエーです。バーで

す。何々會館です。

而も、開地や三宮など、ちがつて、新興地帯だけに當局の取締もいくらか寛大に扱つてゐるせいか、エロ女給のサービスもなかく、垢抜けがしてゐます。

だから、たいして酒も呑めないモボがワンサワンサで押かけます。

道頓堀の美人座などが、いち早く上筒井へ進出したのも、要するに先見の明があつたからでせう。氣の利いたバーやカフェエをざつと拾つてみても、グロリー、ブルゴン、ボンベアン、ザンバー、サロン日本、プリユーバード、ヴィクトリヤ・クラブなど、化粧品の陳列みたくに並んでゐます。

なにしろ、日本人だけをお客にしない神戸では、外人の出入する店が頗る多い。プリユウバードなどは寧ろ外人向と云つてもいゝ位で、毛色の變つた女に接したい人は勇敢に押かけて行くべきです。

それからもう一つ忘れてならないことは、上筒井には高等淫賣が多いといふこと。これは一々名前を發表するわけに行かないし、その巢窟が一定しないから時に當外れがないとも限らないが、野崎通から布引方面へかけては非常にインテリ・マダムの多いことだけはたしかです。

最高積段が、圓見の塔といふから、たちのいゝガイドなどに會はしたらゐんな交渉をしてみるのも面白いでせう。

觀音マシにいちばん必要なことは勇氣です。行きあたりばつたりに「おい、どこか面白い所はないか」と訊ねてみる位の度胸がほしいものだ。

### 朝鮮ガール

上筒井六丁目から坂道を下ると春日野の終點に出ます。上と下ではかうも違ふものかと思はれるほど穢らしい。

ここから脇の濱はすぐ近くだ。

工場地帯であり、従つてプロレタリアの街だ。朝鮮ガールのゐるのは脇の濱や西灘で、小つほけな怪しい家に「朝鮮料理」と看板の出てる家を見たならば

「ははあ、これか」と諸君の方ではうんざりするかも知れません。



その餘りにもお手軽、その餘りにも安直、こちらはだまつてゐても、先様の方からどんな犠牲をも  
敢て辭せず——と云つた工合にもちかけて來ます。

これでは面白くない。

朝鮮料理も勿論い、加減な喰はせものであることは云ふまでもありません。

冗談半分に見に出かける程の代物ではないから、白衣の人肉市場があることだけ申上げてをき  
ます。

### 三の宮の巻

三宮の繁昌は云ふまでもなく地の利を占めてゐるからです。波止場には近いし、外人居留街は目と  
鼻と云つた工合、そして阪神電車の終點が二丁と離れない所にあるのですから、勢ひ人の足が密集し  
ます。新開地が出来るまでは神戸第一の盛り場であつたし、現在でも三宮と云へば世界的に有名なと  
ころ、トア・ロードの秘境と云へば外國マドロスたちさへみんな知つてゐる程の歡樂郷です。

この淫賣窟は前に述べたので省略しますが、白人娼婦をかこつて堂々と營業してゐる。「ナンバ  
ー・ワン」だけは是非諸君に御知らせする義務があると思ひます。

以前には追放問題まで捲き起した此の家は、どんな因果關係があるのか知りませんが、今日ではネ  
オン・サインまでかゝけて悠々と神戸つ兒のドギモを抜いてゐるのだから愉快ではありませんか。

場所は三宮二丁目、鐵道線路側のうすぎたない倉庫の立ち並んだ間に、ボツシと一軒立つてゐる怪  
しげな三階建の洋館がそれです。

外見はあまりバツとしないが、内部はなかくどうして、本牧などのホテルみたいに、すべてがチ  
ヤンと整つてゐます。

而も對手がみな皮膚の透き通るやうな外人だから嬉しいではありませんか。

然るにです。諸君、もし諸君がその劣情を充たす爲にこの家の門をくゞつたら、必ずや諸君は失望  
するであります。

いよいよといふ所までのサービスはしてくれるが、最後に……必ず日本人は突放ねられて丁ひま

す。なかにはひどい奴があつて、枕金だけせしめると、潜々と涙を流しながら悲しい身の上話をはじめだして

「あなた妾と一緒に死んでくれない？」

とアローリングが何かの十二連發を咽喉の先にぐつと突きつけます。

この家に限らず毛唐の淫賣婦は、よくこれに類した藝當を演じますから充分注意して金を使はないと飛んでもない目に合はされます。

それから、三宮附近で逸してならないことはダンス・ホールだ。なにしろ居留地一帯は殆んどサラリーマンの舞窟で、東京で云へば丸ノ内と云つた感じ、おまけに外人が多いからダンス・ホールが三宮を中心に密集するのも無理はありません。

浪花町にキャピトル、京町にエムバイヤ、三宮にソシアル・ダンス・ホールがあります。日本娘と眼玉の蒼い外人とがいつも晴やかに軽いお尻を動かして踊り狂ふ状態は、東京の不良モガたちには確かに羨望的になるでせう。

そもそも神戸にダンス・ホールが許可されたのは、外人が多いからといふ理由がその主なるものですから、京都、大阪に手きびしいダンス・アツがあつてからといふもの、エロエロ・ダンサーが雪を降と神戸の土地に押かけて来ました。

だから舞踊研究所の多いのも京阪神では神戸がダンセン優勢で、中にはするぶんインチキな教授所もあります。而も、それがインチキであることを知つてゐてわざと出かけて行くマドモワゼルがるのだから、何と世の中つてものはありがたいではありませんか。

××ロードを上つて行くと右側に××舞踊教授所といふのがあります。

これなどはインチキ舞踊教授の代表的なもので、ダンスの練習場になつてゐる八疊の次が八疊半位の洋室だ。而もそれが二部屋續いてチャンとダブルベッドが備へてある。

一方が赤い部屋で、一方が黄色い部屋、各部屋の中央にはカーテンがぶら下つて、ベッドはその兩側に二つづつ合計四つのベッドが備へつけられてあるから愉快でせう。

ではかうした個人教授の舞踊所にはどんな女が来るのだらう、云ふまでもなくインチキ教授が、ち

こちらのダンス・ホールに出かけて行つて、これはと思ふ女を引つこぬいて来るのです。

三宮あたりには、堂々たる大ホールを經營してゐる家にさへ秘密室があつたと云ふ位ですから、個人教授でこれ位の藝當を演ずるのは神戸ではさ程珍しい事件でもありません。

舞踊教授と看板を出してゐる癖に紹介状が要るのも變なものです。最初の人には少くとも十日間位は絶対に秘密室を見せないし、相手の素情を見極めてから、始めてそんないゝ場所があることを知らせるのです。全く神戸の人間は度胸がいゝ。神戸の人間は頭がすゝんでゐます。

そんなわけで、警察でもインチキ教授所のブラック・リストを作製し、そんな教師が公開のダンス・ホールなどに入入してゐるのを發見すると直ちに場外につまみ出して丁ふといふことです。が、それにしても、外人の多い都會は何と恵まれてゐるではありませんか。外人様々である。

さて、それではカフェーはどこがよからう。先づ三宮ではキャバレー孔雀をイの一番に御紹介します。生田筋の鐵道踏切下、あの堂々たる宏壯な構へがそれです。だいたい、神戸には名前だけは堂々たるカフェーやバーが多いが、行つてみると「なあんだ、これか」といふやうなのが多いのです。

その點キャバレー孔雀などたしかに威張るだけの價値がありません。階下にはジャズの洪水が渦巻き、二階は高級酒場として情味たつぷりな神戸ガールのウルトラ・サービス。三階が家族席的な工合です。尤も、家族席なんて必ずしも夫婦づれを意味する必要はありません。

女給も二十人以上ゐれば神戸としては多い方です。××會館なんて、ペラ棒でかいカフェーと思はれる家にたつた四五人しか女給がゐなかつたりするんですからネ。

序にモンパリーへも寄つて御覽なさい。こゝの御主人はもと東亞キネマの監督かになにかやつてゐたといふので、店の構へも映畫式なら、女給のサービスも映畫式、おまけに映畫のスター連が始終出入するといふので、わざわざ俳優のお顔拜見と出かけるファンも相當ゐるといふことです。その他、花園、ボート、青空なんてのがありますよ。

### 南京街のエロ風景

今は昔ほどではありません。

なにしろ當局のダンアツがひどかつた爲に、南京街のエロ風景は著しく滅殺されて了りました。怪しい行爲をしてゐる支那人は見つけ次第にとちめて、油をしほつて脅しつけて、地句の果に本國へ送還といふ手痛い扱方でしたから、支那のストリート・ガールは、殆んど神戸の土地から姿を消して了つたと云つてもいい位です。

いまでは三宮驛前と下山手五丁目にたつた二軒の臺灣藝妓の置屋があつて、僅かに支那情緒の餘影をとめてゐるに過ぎません。兩方あはせて藝妓の数は十人もあませうか、何れにしてもはかない寂れ方と云はねばなりません。然も、それさへ當局の眼を恐れて、遠慮しいしい悲しい營業をつけてゐます。

驛前では萬香居、下山手(縣廳裏)では喜月亭、この二軒の家で遊べばニンニク臭い臺灣藝妓が御對手してくれますが、なにしろ日本に對して餘り好感を抱いてゐません。ですから支那人に對してはどんな要求でも受け容れるさうですが、日本人に對してはすべてが萬事といふわけには参らぬといふ。一寸の虫にも五分の魂とやら、エロの世界に對しても嚴然たる國境を設けてゐるところなど、まことに

とに凛然たる意氣愛すべきものがあるではありませんか。

線香代は日本藝妓同様、普通一時間。見當云はれてゐますから、あのウラ寂しい支那の纏綿たる情歌でもききたい人は、彼女たちの怒りを受け慰めるために、あれ抜きにして遊びに行つてやつた方がよろしい。

一寸の虫に五分の魂と云つても、戀の道には國境はありません。意氣さへ投合すればそこはそれ——ネ?

### 新開地の巻

新開地——さう云へばもうそれで澤山で、別に湊川なんて文字をくつつける必要もありません。

神戸から新開地を省いて了つたら、大阪から南地を省いたのと同じやうなものです。

楠公神社前から多聞通、福原の花街地、湊川公園からダラダラ坂を下つたあの賑やかな通り、全く新開地あつての神戸と云つてもいい程、港街唯一の大歌樂郷です。